
親友ともう一步。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友ともう一步。

【Nコード】

N1831R

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

二学期の半端な時期に転校してきた女の子は、学校にも自分にもまるで興味がなさそうで、周囲に集まる連中をまったく気にもせず。
・何故か俺と見詰め合っている・・・

時期外れの転校生（前書き）

「I I don c vie . . .」シリーズの 航と朋花のお話です。

やっと書きました . . .でも前半戦。

中3の二学期からはじまります。

全7話ですので、本日（2/25）から、7日間毎日午前10時更新ですので、

よろしくお願いいたします。

時期外れの転校生

やり忘れた数学の宿題を、泣き落として聡太そつたに借りて今必死に写している。

普段ならそのまま放置なんだが、

「安田くん・・・君がまーったく宿題をやってくれないって、色んな先生から苦情が来てるんだけど？ 明日は大丈夫よね？」

昨日の放課後の教室で、仁王立ちする担任の皆川ちゃんが白い能面のような顔で見下ろすその迫力に押され・・・いや、色んな先生からの俺に対する苦情を、一身で受け止めているのがかわいそうになつて、今日こそはやってやろう！ と、学校で思っていた事を、家に帰った途端にすっかり忘れ、結局いつも通りに過ごしてしまい・・・今に至るといわけだ。

後少して終わりそうな所で、前のドアが開き皆川ちゃんが入ってきた。

やべっ、早くしないと・・・。

「起立、礼、着席。」

日直の合図に不自然なほど素直に従い、座った途端にシャーペンを動かした。

あと一問っ！

「今日は、転校生を紹介します。石川さん入って。」
よっしゃ、これで終わり。

顔を上げると、不自然に髪が短く、高くも低くも無い身長の子が丁度教卓に着いたところだった。

ざわつく声を制して、皆川ちゃんが声を張り上げた。

「はい、静かに。・・・石川さん自己紹介してくれる？」

黒板に大きく名前を書いた後、女の子を促すと、彼女は微かに頷いて前を向いた。

「はじめまして、石川朋花いしかわともかです。」
まるで人事のような顔で、興味なさそうに自分の名前を言って礼儀的に頭を下げた。
初めてで緊張したりとか、より良い印象を残そうとして笑顔を向けるだとかしそうなものだが、この子は違った。『変わったやつだな』それが中3の9月、しかも初日ではなく三週以上も過ぎた中途半端な時期にやって来た転校生の第一印象だった。

「航終わたれわったか？」

皆川ちゃんが出てった後、聡太がノートの回収に来た。

「おうっ、助かった。恩に着る。」

平身低頭で礼を述べたつもりだったんだが、

「ならやって来いよ。」

と、返したばかりのノートで頭を叩かれた。

抗議しようとして身を起すと、何となく視線を感じた気がして、周りを見回し視線の主を探すと、さっきの転校生と目が合った。

普通こういう場合、慌てて目を逸らしたりしそうなものだが、黒目がちな大きな瞳は一向に俺から離れず・・・俺もそんな彼女から目が離す事が出来ず、結果的にじっと見詰め合う事になった。

物珍しさで集まる連中に囲まれていながら、心はさっぱりそこに無いらしい。俺とこうして目を合わせている彼女が話を聞いているとは到底思えないし、その素振りも当然見えない。だが、周りの一人に名を呼ばれてようやく視線が逸れた。逸らす寸前に彼女はフツと微笑み・・・その瞬間俺の心は鷲掴みにされた。

「何呆けてるんだ？」

聡太の声にハツとして、見上げると聡太も彼女の方を向いていた。

「石川さんがどうかしたか？」

「いや・・・うん、俺、惚れたかも。」

「そう・・・って、はっ????」

妙な声を上げる聡太を尻目に、再び彼女の方へ視線を戻した。

HRの時は宿題に気を取られて気付いてなかったが、窓から二番目の一番後ろに机が増えていて、彼女はその席で迷惑そうな眉毛を張り付かせたまま、興味無さそうに周囲で交わされる会話を聞き流している。・・・彼女・・・そうだ、名前は？

「なあ、あの子の名前何だっけ？」

「・・・前に書いてある。」

そういえば、皆川ちゃんが書いていたような気がする。

呆れた視線が容赦なく向けられているが、聡太はそれでも毎回きちんと答えてくれる。さすが親友、持つべきものは友だ。俺は前の黒板を見てその名前を頭に刻み込んだ。

「えーと石川朋花。・・・石川。うーん・・・朋ちゃん、違うな。」

「本気か？」

「何が？」

「いや、今惚れたって言ったろ？」

「嘘言つて何になる？ うん、やっぱり朋花だな。」

三度、朋花の方へ視線を向けると、聡太は何も言わずに自分の席に戻っていった。

このクラスには、きれいな顔をした男の子がいる。

色白のきれいな肌に、切れ長の目を縁取る長いまつ毛、柔らかそうな髪、立ってるだけでさまになるバランスの取れた長身・・・もちろん中学生にしてはだけど。まるで何かの話に出てくる王子様のような雰囲気がある。線が細い感じだから男らしさってのはあまり感じなくて、あ、女装させたらよく似合うかもしれない。名前は為井聡太らしい。

ファンが多いとか、何人告白したって誰にも首を縦に振ってくれないとか、いつも安田って男の子と一緒にいるとか、そんな事が聞いてもないのに勝手に耳に入ってきた。天候初日からしばらくの間、私を珍しがって集まっていた子達が盛んに話していたからだ。

確かに彼女達が言っていたように、いつも同じ子と一緒にいる。為

井くんとは対照的な、よく日に焼けたあの短髪の子が安田というヤツなんだろう。ちなみに身長は二人とも同じくらいだ。

安田くんは、ほぼ毎朝為井くんにノートやプリントを借りて、急いで写している。借りる方も進歩がないが、貸す方もよっぽどのお人好しだなんて思う。

だけど、私と目が合ったまま視線を逸らさなかった安田くんの神経はなかなか面白い。正直興味をそそられた。

その二人は今、一枚の紙を挟んで対峙している。

面倒そうな顔をしている為井くんは、その肩を叩きながら笑っている安田くん。何を話しているのかは分からないが、本当に仲がいいものだ。

昼になると、為井くんはその紙をポケットに突っ込み一人で教室から出て行ってしまった。少しして安田くんも動き出して教室を出て行った。どこに行くのかと目で追うと、すぐその廊下で窓枠に頬杖をついて下を見下ろしている。

何を見ているのか、何となく気になり私も下を覗いてみると、幾分離れた距離だが、日当たりの悪い校舎裏に為井くんと女の子がいた。・・・なるほど、そういう事か。

何事か話した後で・・・って、どう見ても告ってるんだろうけど、いい返事を貰えなかったらしい女の子は走り去って行き、一方、残された為井くんは右手で頭を掻いて向きを変えた。聞かされた通りの光景だ。

二人が眺めていた紙はこの呼び出しのための手紙で、それを当然知っている安田くんはこうやって上から見ていた。

もしかして安田くんは、毎回こうして覗いているんだろうか？でも何のために？いくら仲が良くても・・・ねえ？一応プライベートな所だろうし、親友だとしてもそこまで干渉するか？一つ向こうの窓にいるその背中を見ていると、彼は不意に私の方を向いてニツと笑うと教室の中に入っていった。ああ、あの様子だと好奇心

からの行動かもしれない・・・とりあえず、私が彼について覗いていたのはすっかりバレていたみたいだ。頭は悪そうだが、こういう所は鋭いらしい。

しばらくして戻ってきた為井くんは、

「今日もお勤めご苦労様。」

とふざけた調子の安田くんに出迎えられ、それを一目睨んで弁当を広げた。

時期外れの転校生（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

このシリーズ、時系列バラバラで、本当にすみません。

この二人の話を上げたら、以降は時系列に進むと思います。

もう、二組、三組まとめて書くので・・・（きつと）

あ、思いつきや補足の短編は・・・やりそうな気がしますが（^^）；

後半戦は今ちょこちょこ書いてます。

しるはしとん事(前書わ)

2話目です。

・・・ひせまひん。

つるむという事

一週間も経たないうちに朋花の周りに集まるヤツはいなくなつた。まあ、あれだけ態度が悪ければ当然だろう。ずっと観察してたから間違いない。だが朋花は逆に気楽そうな様子で本を読んでいる。

「・・・航、あんまりジロジロ見るのはどうかと思うぞ?」

呆れ気味の聡太が、机の上のプリントを取り上げて言った。

「あ?・・・でも向こうもよくこつち見てんだ。」

再び朋花を振り返ると、やっぱり今日も目が合った。

「なら毎日眺めてるだけじゃなくて、直接話せばいいんじゃないか? それより写し終わったんなら持つて来いよ。毎回毎回、どうして貸してる僕の方が取りに来なきゃならないんだ?」

「そつか、そつだな・・・聡太の言う通りだ。」

確かに一理ある。聡太のくせにいい事言うな。

じつと見てたつてどうにもならない。ここはやっぱり話をしてみろべきだろう。

「航?」

俺はそのまま朋花の前まで行き、こつと言つた。

「朋花、俺お前に興味がある。今日の帰りに話しさせてくれない?」

周囲の視線を一身に集めた目の前の安田くんは、騒然とした空気を一向に気にした様子もなく、にこやかな顔で私の返事を待っている。「航、お前またいきなりそんな無茶を・・・石川さんごめん、こいついつもいきなり呼び捨てにするから・・・」

航と呼ばれた安田くんは、追いかけて来た為井くんは何事かを目で訴え、逆に睨まれて少し怯んだ。・・・可笑しな組み合わせだと思つていたが、やっぱり可笑しい。

何事もソツなくこなし、女子に人気がありながら誰にもなびかず・・・しかし、安田くんに対する態度から、実は結構いい性格をしてそ

うな気がする為井くん。一方、ふざけてばかりで毎回先生に怒られているくせに一向に反省する様子もなく、それでいて先生からの信頼を得ているような所のある安田くん。今、その二人が、ちょうど私の目の前にいる。

「・・・だったら答えは当然こうだろう。」

「いいよ話しよう。ただし君達二人セットでね。あ、それと、朋花って呼ぶんなら、もちろん私も航って呼ばせてもらうよ?」

一気にそう言うと二人は顔を見合わせ、一人は妙な顔をし、一人は舌打ちをした。

いつものように昼休みに雑誌を広げて一人でお弁当を食べていると、一人の女の子が声をかけてきた。

「ねえ、石川さん、為井くんまで誘ったのはどうして?」

余計な挨拶も前置きも無く、はつきり疑問をぶつけてきたのは好感が持てるが・・・全体の印象は悪い。やっぱり目の笑っていない笑みは見ていて気持ちが悪いと思う。

「・・・どうしてって、あれはセットで面白いから。」

そう言うと、眉がピクツと動いたような気がする。

「・・・その理由はよく分からないけど。為井くんはファンが多いから気を付けた方がいいよ。」

別にこっちも分かってもらおうなんて思っていない。でも、コソコソと・・・さも他の人に気をつけるって感じの言い方は気に入らない。自分は違っただってアピールして、良い人ぶろうとしているこういう人間が私は嫌いだ。

「大原さんもファンなんですよ? 遠回しな言い方は嫌いだから止めてくれる?」

胸の名札に大原とあるので、大原さんでいいんだろう。

すると彼女は一瞬凄顔して、

「何それ!?!」

と、声を荒げた。

「興味無いなら放っておくし、気になつても度胸が無いなら来ないでしょ？ でもわざわざ釘を刺しに来た大原さんは、かなりのファンって事なんじゃないの？」

彼女は何かを言いたそうにしているけれど、口からは何も出てこない。

結局言葉が見つからなかったのか、

「私はそういう人もいるって言いたかっただけよ、どうなつても知らないから！」

不機嫌にそれだけ言い残し、背を向けて離れて行った。

どうなつてもつて、強硬派がいるんだろうか？ じゃあ逆に穏健派とかあつて、そのファンクラブ同士の対立とかが繰り広げられてるんだろうか？ 大原さんの捨て台詞のおかげで頭の中で妙な世界が広がり、可笑しくなってきた。

一人でクスクスと笑っているとふと思い出した。そういえばあの子は、初め頃の周りに集まっていた輪の中にいたような気がする。彼女達は何のために私に為井くんの話聞かせていたんだろう？ 乗ってきたら釘を刺すつもりでもあつたんだろうか？ まあいいや・

・深読みのし過ぎかもしれないし、どっちでもいい。
・……いずれにせよ、この学校も面倒事が多そうな事には変わりはない。

あー、前の学校より面倒な気がしてきた!!

「おい、朋花帰ろつぜ。」

にこやかな航と、諦めた表情の為井くんが近づいて来た。

先生が出て行ってすぐにだ。

「……早いね。」

「いつもこんなもんだ。なっ？」

「うん、面倒だからさっさと逃げるんだ。」

「……そう。」

そんな言い方をされると、私も早くしないとイケないような気がし

て、手早くカバンに荷物を詰めて立ち上がった。

「いいよ、行こうか。」

かなりの数の視線を背に受けながら教室を出て、それ以上の視線を浴びながら学校の敷地から出た。

「・・・ねえ、いつもこうなの？」

どちらかと言えば、自分は人の目を気にしないタイプだと思っていたが・・・これはきつい。視線だけでここまで嫌な気分になったのは初めてだ。もちろん、はっきりとした敵意ばかりでなく、好奇の目の方が多かったと思う。だけどここまで多いと、変な緊張で背中にはびつしり汗をかいて気持ちが悪い。強硬派とか穏健派とか勝手に想像して面白がっていたが、実際にあってもおかしくないような気がしてきた。

「ごめん、大丈夫？ 今日特別凄かったから。」

「朋花がいたからだろ？ いやあ怖いね〜嫉妬。」

謝る為井くんに対して、航は楽しそうだ。慣れている二人はさすがの余裕で、特に航は完全に人事なので、この状況を面白がっている。こちらもなかなかいい性格の持ち主のようだ。

「そうだ、朋花の家ってどっちだ？」

今更ながらに航が聞いた。もし方向が同じならその道すがら話ができるし、違った場合にはどこかに寄り道する事になるのだろう。

「うちはあっち。」

川の向こうの下手を指すと、航が吠えた。

「おー、同じ方向だ！」

為井くんも、驚いている。

「ひょっとして近所だったりして・・・うちは青葉2丁目なんだけど。石川さんは？」

「青葉1丁目。」

「近っ!？」

二人はさらに驚き、見事に八モった。

へー、そうなんだ。ほとんど家まで一緒に帰れそうだ。

惚れただ、興味があるだと言っただけはあり、航は石川さんを質問攻めにしている。

「朋花は一人でいる時気楽そうだな？」

「うん、面倒事が無くていい。」

石川さんも基本的に、いいテンポでそれに答えている。

ただ、前の学校に関する事はパスと言って答えなかった。その辺のバランス感覚に長けた航は、さっさと質問を変えて、彼女に関する情報を引き出そうと躍起になっている。

「そっか、何で俺らはセット扱いなんだ？」

「だってセットでしょ？ 二人一緒の方が楽しそうだし。」

「そうか？ ……じゃあ何でそんなに髪が短いんだ？」

「……それは、パス。」

これも前の学校に関する事なんだろう。前の学校でどんな嫌な事があったのか、傍で聞いていても気になるが触れてはいけない部分なのだろう。

「そっか、じゃあ付き合って欲しいんだけど……俺朋花に惚れたなあ駄目か？」

何故か航の質問攻めは、突然告白に行き着いた。……って、どんな流れなんだそれは？

僕も、石川さんももちろん啞然としていたのだが、彼女は急に笑い出した。

「何て突然だ？ 航は一人でも面白いな、」

褒めてるのか貶けなしてるのかよく分からない言葉なのに、航はまんざらでもない様子で頭に手をやる。

「そうか？」

「でも保留。私、航の事よく知らないもん。」

そう言うとチラリと僕の方を向いて笑いかけてきた。

「為井くんの事も知らないけどね。」

「えっ、ああ……そうだね。」

完全に傍観者を決め込んでいた僕は急に振られて言葉に詰まり、そのまま石川さんのペースに巻き込まれた。

「ねえ、為井くんの事も呼び捨てでいい？ 聡太だったよね？ 私の事朋花って呼んでいいから。」

「・・・はっ？」

何で僕まで？

「いや、急にそんな事言われても、航と違って呼び捨てはちょっと・・・」

呼ばれるのは構わないけど、呼びにくい。

「じゃあ、聡太くんって呼ぶから、そっちも下で呼んでね。」

強引な子だな、・・・でもこういうタイプは引かない。些ちよか独善的で自信に溢れている数人の顔を思い浮かべて苦笑した。僕の周りにはそんな人達ばかりだ。

えーと、朋花ちゃん・・・は言いにくいな、

「・・・じゃあ、朋ちゃんでもいい？」

「OKいいよ、それでいいこう。」

その後は先程とは逆に、上機嫌の朋ちゃんが航を質問攻めにしていた。長い付き合いの僕は取り立てて聞く事も無いと思っていたのだが、真面目に答えている航を見るのは結構面白かった。

つるむという事（後書き）

・・・聡太くんはどんな人なんでしょうね？

書いている人が言っちゃいけないって？

一番最初の話書いた頃の落書きはあるんですが、それとは少しずれたかなと。

しかも、段々性格が確定してきて、情けない子になってきてます（私の中では）

奇立ちの理由(前書き)

3 話目です。

・・・ひびきひびき。

苛立ちの理由

なんだか面白くない。朋花は聡太に笑いかけた。告白したのは俺だつてのに、それは笑われた。

ベッドに転がって雑誌を捲っていたが、頭の中では今日の帰りの事を考えていた。

・・・たく、また聡太かよ？

「ああ、くそつ、」

思わずガンと壁を殴ったが、当たり方が悪く結構痛かった。だが、そのおかげで少し冷静になれた。

まあ保留なだけまだマシなんだろう・・・どうせ聡太は興味を示すわけがないんだ。それに家が近所だつてのは、願っても無い幸運だった。ああそうだ、運がいい。

そう自分に言い聞かせながら向きを変え、仰向けになって目を閉じると、突然乱暴にドアが開き俺は飛び起きた。

「航、何で急に壁叩くのよ!? びっくりしたじゃない!!」

うわっ、鬼が来たっ! びっくりして、俺だつて今十分驚かされたよ・・・だけど、そんな事を言った日にはどんな目に遭うか分かったもんじゃない。

「あつ、ねーちゃんゴメン、ちょいイライラしてたから・・・」

「あなたのイライラで私まで苛つかせないですよ。」

そんな言い訳は一切通じず・・・つかつかと近付いて来たねーちゃんは、俺の襟首を掴み体重をかけて俺をもう一度布団に転がすと、喉元を押さえつけたまま寒気のする視線を落としてきた。

「壁なんか当たっても何にもならないでしょ? それよりもっとマシな方へ向けなさいよ。元凶に返すとかさ、」

ねーちゃんは、目には目を、歯に歯を実践してくる性格だ。やられたらやり返す・・・けど、壁叩いたぐらいでこれかよ? しかも、長く伸びた髪が顔に当たってくすぐりたい。笑うに笑えず、逃げら

れもせず、もう勘弁して下さい!!

「はい、お姉様そうします・・・。」

当然、柳のように逆らわずそう答えて難を逃れたが、このイライラの原因が聡太にあると言ったら、ねーちゃんはどんな反応を見せるんだろう？ まあ、いずれにせよ被害に遭うのは間違い無く俺なので、試す気にはなれないんだが。

・・・まったく、何で聡太はこんなのがいいんだか・・・俺にはさっぱり分らない。

ヘッドホンで音楽を聞きながらベッドの上で音楽雑誌を広げていたら、部屋の空気が動くのを感じた。雑誌から目を外して入り口の方を見ると、バカみたいに嬉しそうな顔をした兄貴が見えた。

「何か用？」

リモコンの一時停止のボタンを押してヘッドホンをずらしながら、兄貴を睨みつけた。

「朋花機嫌よさそうだな、外まで歌声聞こえてたぞ。」
意識していなかったけど、口ずさんでいたらしい。

「そう・・・さっきまではね、今は和樹のせいで機嫌が悪い。で、何の用なの？」

「あー、用って事の程は無いんだが・・・」

今帰ってきたばかりなのか制服姿のまま、どでかいカバンを担いだ兄貴は入り口で立ち尽くして頭を掻いている。

「じゃあ出て締めて。」

「いや、ある、用ある。」

兄貴は慌てた様子で勝手に部屋の中に入ってドアを締めた。

『出て』を強調したのだが、出て行ってはくれなかった。

「何？」

諦めて、改めてそう聞いてみたが、どうせ言いそうな事は分かっている。

「あー、学校どうだ？ その・・・友達とかできたか？」

・・・やっぱり。

兄貴は恐る恐る・・・壊れ物に触れるように私を窺っていて、正直もう面倒くさい。以前は多少過保護ながらもここまでじゃ無かったのに・・・。

「できたよ。もう下の名前で呼ぶ仲だよ。」

「そ、そうか、よかつたな。」

素直に喜ぶそんな態度も気に入らないから、私はいつも兄貴を苛める。

「うん、キレイな男の子と、いきなり告白してきた男の子だよ。」

「はあっ!? 男だと? な、何、告白!?!」

裏返りそうな声で取り乱す兄貴は期待通以上の反応で大満足だが、さすがにうるさいので部屋から蹴り出した。

「朋花、返事は? 返事は何て返したんだ!?!」

まだ廊下で何か騒いでるが、私は気にせずヘッドホンをはめ直してリモコンの再生ボタンを押した。

朝、学校へ向かう川沿いの道を歩いていると、複数の足音が走り寄つて来た。

「おう、朋花おはよう。学校まで一緒に行こうぜ。」

「・・・おはよ、う。」

息を弾ませながらも余裕の航と、挨拶が精一杯の聡太くん。こういう所も対照的なんだな。

「何? 二人は学校までジョギングしてんの?」

「おう、体力作りは大事だからな。」

「・・・違う、こいつが出て来ないからだ!」

聡太くんは苛ついた様子で航を睨むが、睨まれた方はどこ吹く風だ。「そっか、今度から私も混ぜて。航の家に行けばいいの? 私走るの結構得意だよ。」

昨日の帰りに航の家の前を通って、そこで分かれた。特に遠回りと

いうわけでもなく、ただその通りを選べばいいだけだ。聡太くんの家は更に近く、よく話してみると通りを挟んだ反対側のブロックだった。

「それいいな、明日から一緒に行こう。」

「道連れを増やすな、誘うなら誘うで迷惑かけないようにさっさと出て来い！ 朋ちゃんも考え直してくれると・・・。」

「いい、いい、私走るのは好きだから。」

最近走って無いので少し心が弾む。前の学校では陸上部だったが、ここには半端な時期に転校する事になったので部活には入らなかった。そもそも転校自体が乗り気では無かったものの、家族の勧めに仕方なく従ったのだ。

「そうだ、帰りにうち寄ってけよ。うちの親に紹介しとくよ。」

「はっ？・・・紹介って、私何を紹介されるの？」

きちんと返事をしてないけれど、付き合ってくれと告白してきた相手の親に紹介されるっていうのは、変に身構えてしまう。いや、本当にどういう気なのかよく分からない。

「うちのチャイム鳴らして、誰？ っつても嫌だろ？」

いや、それはどうせ最初の日に一度説明すればいいだけの気がするよ？ 航の気遣いに悪い気はしないけど、その発想には疑問を感じる・・・。

「聡太も来るだろ、どうせ。」

「ああ、来いと言うならもちろん行く。」

まだ高潮した頬と整わない息の聡太くんが即座に賛成したので、今日の帰りは航の家に寄る事になった。

この時の私は、聡太くんの紅潮に別の理由がある事にまだ気付いていなかった。

「石川さん、どうして為井くん達と一緒に来たの？」

ファンの一人らしい子が、授業の間の休憩時間トイレに立った私の後を追いかけて、つまり・・・一人の時をを狙って聞いてきた。教

室で三人でつるんでいた所には来なかつたくせに。ちなみに彼女は
大原さんではない。名札には松下と書いてある。

「家が近所だったから。・・・それが何か？」

「何かって、別に・・・。」

別について・・・どうせこの子も、私が聡太くんの側にいるのが気に入らないって絶対思っているんだろう？ でも、それをはずきり言うだけの度胸が無いのなら話しかけないで欲しい。いずれにせよ、言われた所で従う気は毛頭無いけどさ・・・友達は自分で選ぶ。

「そう、じゃあいいね。」

何か言いたげな目を向ける松下さんに、そう言ってさっさと切り上げ向きを変えた。

ああ面倒だ、私はトイレに行きたいの。そんな時に呼び止めるな、バカっ！

さらに面倒な事に、このやりとりを何人かが同じような目で見ていた。

あーもう、本当に面倒だ！！

昼休みに俺は、いつものように雑誌を広げる朋花を誘った。

「航どしたの？」

「外で食わねーか？ 天気いいし。」

「そう、いいけど。」

不思議そうな顔をしていたが、首は縦に振られた。

何となく嫌な空気の、居心地悪い教室から朋花を連れ出したった。本人はさほど気にした様子もなかったが、俺は朋花に敵意の込められた目が向けられているのがとても嫌だった。

弁当の入ったカバンを手にして、三人で廊下を歩く。

「どこ行く？」

付き合わされた形の聡太が聞いてきた。だが、連れ出すのが目的だっただけで、目的地なんか決めてない俺はパスした。

「さあ、どこがいいかな？」

曖昧に濁すと、朋花が窓の外を指差した。

「あれ何？」

その先には組み合わされた石の塊がある。

「ああ、あれは戦争絡みの慰霊碑だよ。」

聡太が答えた。

「へー。」

朋花と俺の声が見事に重なり、聡太の厳しい目が俺に向けられた。

「・・・航、今まで知らなかったのか？」

「おう、今知った。」

二年と半分くらいこの学校にいて、あの石の存在は当然知ってたが、あれが何かなんて興味も無いのでいつも素通りしていた。

「あのそばいい感じの芝生だね、あそこ行こう。」

朋花は何か言おうとしていた聡太を遮って笑顔を向けた。

慰霊碑と聞いて正直、いい気はしなかったが、他に案もないし、朋花が可愛かったし、あくまでも『そば』だと自分に言い聞かせ、そこに行つて弁当を広げる事にした。

奇立ちの理由（後書き）

朋花の兄の和樹は4歳上の高3です。

でも、美晴や葵とは学校が違います。

・・・ここで補足説明はするいか（^^；

でも、自分の中では（書いてて）いいキャラ。

シスコン最高！（違）

でも世のお兄ちゃんって、結局はこんな感じですよね？

うちのちびっ子でも、何か兄は妹に色々気を使ってるのに対して、

妹は兄に容赦無い。

知る事と、気付いた事と、理解した事（前書き）

4 話目です。

・・・ではさようなら。

知る事と、気付いた事と、理解した事

学校が終わると、朝の約束通り二人で航の家に寄った。

私は、正直どんな顔して紹介されたものかと思案していたというのに、航はただいまとも言わずに、

「母さん、この子朋花ってんだけど、学校一緒に行く事にしたから。明日の朝から迎えに来事になってるから覚えといて。」

そう唐突に、リビングでパソコンを突付いていた彼の母親にいきなりそう告げた。

「朋花・・・ちゃん？・・・航が女の子？」

腕を引つ張っていかれた私はどうしたものか、頭を抱えたい気分のままとりあえずは名乗っておく事にした。

「・・・あ、始めまして、同じクラスの石川朋花です。ちなみに彼女じゃありません。」

だって、突然で他に言う事思いつかないし、お母さん呆然としてるから誤解は解いておきたいし！！

すると母親は、はっと我に帰ったようで、立ち上がって側までくると息子の耳を引つ張り少し離れた場所に移動した。

イテテと声を上げる息子に、

「遅刻の道連れ増やしてんじゃないよ。聡太くんにも迷惑かけっぱなしなのに、あんた何考えてんの！？」

と小声で小言を言っている。まる聞こえだけどさ・・・。

「おばさん、最悪置いていくから大丈夫だよ。朋ちゃん転校してきたばっかであた友達少ないし、僕達と家近いから一緒に行こうって事になったんだ。」

割って入った聡太くんの補足で、母親は表情を変えた。

「あら聡太くん、航そうなの？」

「そうだよ、痛いから、耳、耳離せ！」

「・・・あなたの言葉が足りないから、よっ。」

最後により強く耳を引つ張られて航は解放された。

「痛てえっ!？」

結局聡太くんに、より詳しく正確に紹介された私は、紹介するって言ったのはどこの誰だよと、内心で突っ込みを入れてこの親子を見比べた。しゃがみ込んで耳を擦る息子と、取り繕って聡太くんに毎日ごめんねと謝る母親は面差しがよく似ている。愛嬌のある表情の豊かさも、さすがに親子だという所だろう。・・・余所の家族は面白い。

聡太くんの後、私にもこれから迷惑かけると思うけど、その時は見捨てていいからね。と言われた・・・この息子はどれだけ信用が無いんだ？

その後、この際だからと二人で見張って航に宿題をさせた。これで明日は持つて行くのを忘れない限り、朝に慌てて写すような事は無いはずだ。

6時になって、どこかガツカリした様子の聡太くと一緒に家を出た。

「結局ねーちゃん帰って来なかったな、帰りに美晴のとこ寄ってん
だろうな。」

「かもね、」

玄関で二人が私の知らない人達について話した後、『また明日ね』と手を振って航と別れた。何故帰り際にお姉さんの話が出てきたのかよく分からないので、少し探りを入れてみる事にした。

「航はお姉さんがいるんだね・・・ねえ、どんな人？」

聡太くんは一瞬驚いた素振りを見せて、それから少し挙動不審になった。

「・・・うん、いるけど・・・何で？」

「母親が面白い人だったから・・・好奇心？」

私がそう言つと、笑うのを堪えたらしい。

「面白いか・・・朋ちゃんはそう思うのか。僕は結構ハラハラするんだけどね。」

「人前であそこまでやる人なかないよ？ だからお姉さんはどんな人かなって。」

「えーと、葵姉はね・・・。」

へー、葵姉って呼ぶんだ。

聡太くんは何を思い出しているものか、すごく遠い感じの目をしてしばらく黙り込んだ。

「きれいで怖くて優しい人・・・かな？」

「そう、怖くて優しいんだ？」

一見矛盾するような形容詞を二つ並べた聡太くんは、また少し考えて満足そうに頷いた。

「きれいで怖くて優しい・・・うん、ピッタリな表現だと思う。」

そう言う本人もきれいな顔で思い出し笑いをしている。これまで見ていた彼は、表情をかくしたような澄まし顔や、きれいな顔が勿体無いほど眉間にシワを寄せたり、私や航に振り回され諦めや疲労の表情を浮かべてばかりいたけど・・・こんな顔するんだ。これは新たな発見だ。

今日は朋花の帰りが遅かったらしい。

どこで寄り道していたのか、兄としては是非とも聞き出したい。前の学校をあんな形で転校する事になり、益々妹の事が心配になった。あの一言・・・どこるか二言三言多い、真っ直ぐ過ぎる性格はきつとまたトラブルを引き寄せる。そこは直した方がいいし、その方がこの先も楽だと思う・・・けど、そこが朋花のいい所だとも思うし、絶対に直さないと知ってる。だから、いくら過保護と思われようが、鬱陶しいと思われようが、お兄ちゃんはそんな朋花の事が心配で心配でならないんだ・・・。

「なあ、朋花・・・。」

「何？」

夕食後、自室に戻ろうとする朋花を追いかけて廊下で声をかけると、いつものように冷たい声が返ってきた。しかし振り向く姿は、以前のように髪がなびく事が無く・・・それだけで心が痛む。

「今日・・・どこか寄ってきたのか？」

しばらくじつと俺を見上げた後、ニヤリと笑う。

「うん、友達の家。」

事もなげにそう言うが、昨日友達は男だと言った。

「・・・その友達って・・・男の子かな」

「もつちろん。」

肯定して・・・俺の顔を見て笑った。

からかわれてるのは百も承知だ。でもいい、いや本当はよくないけど、それでも朋花が笑ってくれるならそれでもいい。・・・いや、でも・・・欲を言えばもつとマシな理由で笑って欲しいけど・・・それまではピエロにだって何にだってなってるさ！

機嫌が直ったと錯覚した俺は、朋花に気なっていた事を聞いてみた。・・・が、それは大きな間違いだとすぐに気付く事になる。

「あのさ、女の子の友達はいないのか？」
言い終わらないうちに表情は一変し、体を震わせながら大きな声を出した。

「いらない！ どいつもこいつも変なルール勝手に作って、みんな一緒じゃなきゃ行動できないくせに、自由に動けるやつを変な目で見て・・・あんなの理解できない！ 何であんなのと友達になんなきゃいけないの！？」

敵意を剥き出しにして忌々しそうにそう吐き出しながら、俺は蹴り飛ばされた。

・・・俺は見事に地雷を踏んだらしい。

朝、三人で一緒に学校に行くために航の家に向かうと、家の前には

もう聡太くんが来ていてチャイムを押していた。
声をかけようとしたら、玄関のドアが開き髪の長い女の人が勢いよく出てきた。私が今通っている中学のすぐ側にある高校の制服を着ている。なるほど、あれが航のお姉さんか・・・確かにきれいな人だ。

航と目の雰囲気は似てる・・・かもしれないが受ける印象が全く違う。航ははつきり母親似だったけど・・・もし、残る父親の顔を見る事ができれば、DNAの不思議が理解できるかもしれない。

お姉さんは癖の無い真っ直ぐな髪を揺らして聡太くんの側まで行くと、きれいな顔をほころばせ、そして、聡太くんもそれを笑顔で迎えた。こうしてきれいな二人が並んでいる姿はとても絵になるなど、私はつい見とれてしまった。

「おはよう、聡太。いつも時間通りね。」

「おはよう、葵姉こそ。弟は？」

「着替えてる頃かな？ 何なら置いてっていいわよ。」

「そうだね。」

「じゃあ、美晴待たせると怒るから先行くね。」

「うん、じゃあね。」

ただの朝の挨拶だ。

だけど、右手を上げて遠ざかる後ろ姿を名残惜しそうに見送る聡太くんは、さながら美姫に心奪われた王子のようで・・・。

なるほど、昨日の遠くを見るような視線の先にはあの人がいるって事か。しかし、おそらく毎朝の・・・たったこれだけの一時ひとときを大事にしているんなら、聡太くんはかなりの純情少年だな・・・。
何か可笑的い。

この光景をあの方クラブの連中や、こっそり慕っているようなやつらに見せたいものだ。かなりの人数が払いのけられて聡太くんは楽になるだろう。誰も物語のヒロインにはなれない・・・きつとそれがはつきりと分かるから。

あの人・・・航の姉さん意外はみんな一読者に過ぎないんだって。

今の調子だと物語が進展するかどうかはあまり期待できそうにないけど、彼の友達であるかぎり、ずっと彼の歩む物語を見る事ができるだろう。

・・・うん、それも悪くないな。

そんな事を考えているうちに、彼の視線の先にいる人は角を曲がって見えなくなった。私は一度深呼吸をして、大きく空気を吸い込んだ。

「おい、聡太くんおはよう、・・・航は？」

「あ、おはよう、朋ちゃん。出てこないから先行く？」

よし、見た事はばれてないみたいだ。

「あ、チャイム連打したら出てこないかな？」

「朋ちゃん？ そろそろ事すると、おばさんには迷惑かかるから止めようね？」

顔を引きつらせた真面目な彼に注意されると、玄関のドアが開いて眠そうな顔した航が出てきた。

知る事と、気付いた事と、理解した事（後書き）

「求める者。」での縛りが影響したお話です。

「三日くらいで諦めた」って台詞のところですね。

ホワイトデー系のお話終わったら、「求める者。」絶対書き直してやる。

あとは・・・予想外に安田家の母親出てきましたね。
パワフルで、アットホームな家庭です。

対話の意義（前書き）

5 話目です。

・・・ではさしあげ。

対話の意義

「あのさ、後ろ・・・怪しい人いるよね。」

ある日の学校からの帰り道、聡太くんが囁いた。

みんなで立ち止まって後ろを振り返ると、黒いジャージ姿の兄貴が慌てて電柱の陰に隠れた。

「誰だあれ？」

航も怪訝な顔をする。今のはすっかり兄貴にも聞こえてるだろうか、どうせ今頃は嫌な汗をかいてるんだろうな・・・でも。

「さあ、知らない。あ、そうだ、怪しい人がいますって、みんなで交番に駆け込もうか？」

わざわざ聞かせるために、はっきりと大きな声で言うと、

「ま、待って朋花、お兄ちゃんだから、知らない人って言わないで、お願いします!!!」

慌てて出て来て両手を上げた降参のポーズを取る兄貴に、二人は啞然としている。

「・・・で、和樹はこんなとこで何やってんの？」

そんな二人を尻目にジリジリと近付き、後一步という所で立ち止まると、足を払って引っくり返して見下す。

「ほら、何やってた？」

肩に軽く蹴りを入れて転がし、腹を軽く踏んだ。

「と、朋ちゃん？ それ・・・その人お兄さんだよな？」

かなり引いた感じの聡太くんの声が聞こえた。

「そうだよ。じゃなきゃこんな事しないって、しかもジャージだから汚しても平気。」

「朋花、平気って何だ!？」

兄貴の不満の声が聞こえたが、それはあっさり無視させてもらう。

「止めとけ、やりすぎだろこれは？」

「そう?」

航も珍しく真面目な顔して私の腕を引つ張り、足を下ろさせようとしているので、素直にそれに従った。

「朋ちゃん・・・君は絶対この間の事言えない。人前どころか、普通外でこういう事はしないとと思うよ？ それにさ、何か・・・こういうの見るのは居たたまれない気分になるんだ。僕も妹いるから、さ・・・。」

言いようのない目をする聡太くんには妹がいるらしい。仕方ない。

「・・・和樹、今は二人に免じて見逃してやるけど、もう二度としないですよ？」

睨みを効かせて一喝すると、兄貴は手前の角に向かって走り込んだ。「兄の威厳って無いのな、おまえん家。」
姉のいる航はそう言い、

「たぶん、女が強いつて事だと思うよ。」

兄の立場である聡太くんはこう言った。
とりあえず兄貴のおかげで二人の抱く『兄妹』のイメージが違う事がはつきりと分かった。

「痛つつ・・・。」

玄関のドアを開けて中に入ると同時に、何かが額にヒットした。当たった場所に手をやると、何かベタベタした液体が手につき、それは髪にまで張り付いている。俺にぶつかった後それは下に落ちた。下を向いてその何かを確認すると、4つに割れたリンゴが転がっていた。確かに甘いリンゴの匂いが辺りに充満していて、手についたベタベタした液体を舐めるとリンゴの味がした。

帰るタイミングをずらしたつもりだったのだが、玄関を開けると正面に朋花が待ち構えていて、そこからそのリンゴは飛んできた。

「と、朋花っ、二人に免じて許すって言ってなかったか？」

「いいや、言っていない。見逃すって言ったただけだっ！」

玄関の段差で同じくらい目の線の朋花は、怒りの目を俺に向けて腕組みをしている。

「・・・お前、だからってここまでやるか？」

「はあ！？ どっちが？ 妹尾行って何やってんの？」

「ぐっ、そ、それは・・・お兄ちゃんは心配して・・・。」

「何が心配だ、何が。私は和樹に心配してもらおうような事は無いね。」

確かに・・・俺が勝手に心配してるだけだ・・・だけど、

「だけど、リンゴは痛いだろ、リンゴは!？」

「ぶつけられた事無いから知らないよ。でも確実に割れるように切り込みを

入れといたんだ。そのままよりぶつけるより、きつとダメージ減だよ？」

「それが何だ、そんな事恩着せがましく言われても嬉しく無いっての！」

「二人ともうるさいよ!！」

台所から鋭い一喝がして、夕飯の準備中だった母さんが面倒そうに出て来た。そのまま俺達の方に近付いてきて・・・玄関に転がる無残なリンゴを発見した。

・・・まずい。

ただの兄弟喧嘩なら、静かにやれとだけ言って放っておくが、こういうのには厳しい。

「・・・食べ物を粗末にするのは誰かな？」

俺と朋花を交互に見据えて静に言った。これは怒鳴る時よりも遥かに怒っているサインだ。

「あっ・・・その・・・お母さん？」

「あーっ、えーと、それは・・・。」

うちの喧嘩はいつも両成敗だ。結局二人並んで廊下に正座させられ

ている。

「何で和樹はいつも、私のせいだって言わないの？」

さすがに小さい時は記憶に無いけど、私が悪い時だっていつも兄貴は一緒に怒られて、こうやって正座させられている。

「言っても言わなくても、どっちにしる母さんには怒られるんだからいいじゃないか。言い訳じみた事して後味の悪い思いするのも嫌だしな。」

兄貴は視線を合わせず達観したような事を言った。

確かに、お母さんはどっちが悪いとかあんまり聞きもせず纏めて怒るけど・・・

「・・・そういうもの？ でもぶつけたの私だよ？」

今回お母さんを怒らせた理由は、確実に私にある。

「いや、もともと俺が朋花を怒らせたんだろ？」

怒られて正座させられる時間は、騒げばまた怒られるし、黙っているのもつまらないので、いつもこうして静かに兄貴と話をする。

「・・・私もやり過ぎたし。」

話してるうちに段々と冷静になって、特別謝らなくても結局ここで仲直りが成立する。

「俺な、あの件があつてから必要以上に朋花が心配なんだ。」

「・・・知ってる。」

だから過保護過ぎて腹立つんだ。今更ながらに驚いた顔して見下ろす兄貴に笑顔を返した。

「和樹にも迷惑かけて悪いなっと思ってるんだ。学校少し遠くなつて時間が余計にかかるし、友達の家も遠くなつたよね。」

前の学校で・・・ある事件が起きた。不本意ながら私は被害者という立場になる。以前からいじめにあつていた友人が夏休みを期に転校し、休み明けにそれを知り憤った私が加害者達に抗議し、多勢に無勢でやり返されただけの話だ。

だけど、誰かが持ち出したハサミのせいで事は大きくなった。背中

までであった私の髪の一部がバツサリと切られ、はつきりと目に見える形で発覚した事件に学校は良い反応を見せず、良い対応もできず・
・そんな学校に私の家族は呆れ背を向ける事を選んだ。

私は逃げるような選択をしなくなかったのだが、結局は両親や兄貴の説得に折れ、学区が変わる程度の距離に引越し、今の学校に転校する事になったのだ。

もちろん父さんの仕事や、兄貴の学校の都合があるからそんなに遠い距離ではないが、この際だからと、アパート暮らしから中古の家を購入する事にもなった。

「別に・・・俺はそのくらい気にしてないよ、・・・どうせ自転車だし、・・・学校行きやいつも通りだし。」

きつと照れくさいんだろう。兄貴はリンゴをぶつけた辺りの髪の毛をいじりながらそっぽを向くと、改めてリンゴの香りが漂った。

「私は大丈夫だよ。それより自分の事心配したら？ 高3の受験生。」

「お前もな、中3の受験生。」

仲直りもできたし、ずっと気にしてた事も話せた。苛つく事が多い兄貴だけど、結構いい所もあるのかもしれない。

・・・ただ、とっても足が痺れたんだけど・・・まだ駄目かな、お母さん？

対話の意義（後書き）

見せ場はやっぱり兄貴・・・とりんゴ？

私もぶつけた事は無いですよ？ もちろんぶつけられた事も。なので、どれだけ痛いかは知りません。

石川家は、いい意味で、親は無くとも子は育つ的な感じですよ。いちいち兄弟喧嘩の仲裁になんか入りません。

焦燥と傷痕（前書き）

6 話目です。

・・・ではさしあげ。

焦燥と傷痕

「ねえ、石川さんいいかな？」

次の授業の準備をしていると、何となく聞き覚えのある声で名前を呼ばれたので、気乗りしないままに見上げるとこの間声をかけてきた子だった。

名札に松下と書いてあるから間違いないと思う。

「よくない……って言っても聞かないよね、どうせ？」

わざとバカにしたように言ってるのに、通じた様子も無く話を続けてくる。

「ねえ放課後、美術室に来てくれない？」

……呼び出しか？ つまんないやつだな。

「何か言いたい事あるなら、今ここで言えば？」

「いいよ、放課後にしとく。」

そう謙遜するようにはいかむその態度がどうにも嫌な感じで癢に触り、気持ち悪い……そう思った。

「あれ？ 朋花いないぞ。」

「本当だ、朋ちゃんどこ行ったのかな？」

いつものように一緒に帰ろうとしたら、朋花がいなかった。

ちよつと皆川ちゃんに捕まっている間に、どこかに行ってしまったらしい。聡太も見えていなかったらしく、二人して顔を見合わせる事になった。

「なあ、朋花知らないか？」

朋花の隣のやつに聞くと、不思議そうな顔をした。

「石川さんだよ。」

聡太が補足を入れると、納得がいったらしく口を開いた。

「ああそれなら、終わってすぐ急いで教室から出て行ったよ。」

「どこに？」

「それは知らないよ。そのうち戻ってくるんじゃない？」

確かに荷物は机に置いたままだ。

そいつはそれだけ言うのと、用事は終わったとばかりに荷物をまとめて教室から出て行った。

・・・が、10分、15分と過ぎてても戻ってはこない。手持ち無沙汰のまま黒板の上の時計の針は動き、時間だけが過ぎて行く。時間が経てば経つほど、俺の中で嫌な想像が膨らんできて落ち着かない事この上無い。

既に教室の中は俺と聡太だけになっている。廊下の方から少し声はするが、部活の連中はとくに部室や更衣室に向かっているし、何もしてないやつらはとっとと帰っている。

「・・・どこ行ったんだ！？」

もう絶対トイレとか、そういう事は無いはずだ。

「そんなに苛つかなくても・・・。」

椅子に後ろ向きに座った聡太は、暢気な事を言う。

「だけど、もし・・・。」

俺達・・・いや、聡太と仲良くしてる事で厄介な事に巻き込まれてたら・・・とは、さすがに本人に言えないので言葉を濁した。

「・・・俺ちよつと探してみる。聡太はここにいてくれ、戻ってくるかもしれないし。入れ違いになっても面倒だから。」

「ああ、分かった。」

・・・もしこの嫌な予感が当たっていたら・・・聡太にはそういう所は見せたくない。

「じゃ、行ってくる。」

できるだけ笑顔で聡太に言って、教室を出た。

・・・さて、どこに行ったものか？

やっぱり嫌な目だ。
気持ち悪い。

こういう面倒な事は、さっさと済ませたいからHRが終わるとすぐに美術室に来た。

私が一番乗りで、呼び出した側のやつはまだ誰も来ていない。さて何人来るんだろうか・・・ああいう輩はどうせ群れでしか行動しない。

・・・前もそうだった。

もちろん二人には何も言わずに来た。こういう逆恨み的な事で二人を・・・特に聡太くんを困らせたくはない。

時間潰しに石膏像に描かれた鉛筆の落書きを眺め、それから、ブロツクを重ねたような色見本を眺めていると、外からきゃあきゃあとい甲高い女の子の音が近付いてきて、開いたままだったドアから三人の女の子の姿が見えた。

・・・三人か、まあ少ない方が。

当然向こうも私の姿を認めたのだろう。あれだけ賑やかだったものが水を打ったように静かになる。もちろん最初に声をかけてきた子も、二番目に声をかけてきた子の姿もある。もう一人は違うクラスなのだろう、まったく見覚えが無かった。

あえて腕組みで偉そうな態度をとって出迎えると、最後に入ってきた子はご丁寧にもきちんとドアを閉めた。慣れてるって事か？

「で、何の用？」

その声をかけると、三人はこそこそと目配せを始めた。

うわっ、面倒な連中だな・・・。あんた言いなよ、いやよスーちゃん言いなよと譲り合っているばかりで、何も始まらない。

「・・・ねえ、話無いなら帰るよ？」

呆れた私がそう言っていると、ようやく一人が口を開いた。

「石川さん、為井くんと仲いいよね？」

えーと、確か・・・大原さんだっけ？

「そうだね、友達だけど何か？」

そんな事わざわざ確認しなくたって、見ててそう思ってるからこうやって呼んでんでしょ？」

「行き帰りも一緒だよな？」

「そうだよ、だから何？」

「お弁当も外で一緒に食べてたよね？」

「・・・よくご存知で、」

「そりゃ、よく見える場所だもの。」

大原さんがそういうと、他の二人がクスクスと笑った。

あーこういうの、本当に苛つく。

「名前で呼び合うほど仲良いんだね？」

「だから・・・羨ましいなら、そう言えばいいんじゃない？」

きっぱりそう言うと、三人は睨み付けてきた。

「目は口ほどに物を言う。口が役に立たないんなら、呼び出さないでくれる？」

鼻で笑って出て行こうとすると、待ちなさいよと手首を掴まれた。

その時一瞬、その手ではない違う手に掴まれた自分の手首が脳裏を過ぎった。・・・何これ？

「放せ。」

「まだ話は終わってないわよ。」

後ろの知らないやつがそう動いていた。

「話も何も、何も言わないのはそっちだよな？・・・私には、自分は何もしないでただ人を羨んでるやつらと・・・話す事なんか無いから。」

・・・気持ち悪い。

あの目は嫌だ。

「そっちに無くて、こっちにはあるの。」

誰が言ったなんて、もうどうでもいい。とにかく気持ちが悪い。

「・・・じゃあそれ早く言ってよ。」

何かこれ・・・心臓の鼓動早くない？ 変に息苦しくて汗かいてき

た。

「為井くんに近付かないでくれる？」

この気分の悪い時に、何わけの分からない事を言ってるんだか・・・
「どうして？ 友達と話して・・・友達と一緒に帰って何が悪いの？
・・・そんな嫉妬に、どうして、私が付き合わなきゃ・・・なんないの？」

駄目だ・・・最高に気分悪い・・・そろそろ限界。何か言ってる気がするけど・・・もう無理。

「ごめん・・・今、私・・・気分悪い・・・。」

しゃがみ込もうとして、掴まれたままだった腕を引っ張られると、再び以前に見た光景が頭の中で再生される。

「やめろっ！！！」

腕を振りまわして、掴まれていた手を振りほどいた。

・・・だめだ・・・何でだ？ 今じゃないだろう、これ・・・ああ、何だか頭まで痛くなってきた・・・。

ズキズキと痛む頭を両手で抱えて目を閉じると、再び頭の中で嫌な場面が繰り返される。

数人の女生徒、捕まれた腕、光るハサミ、嫌な目、床に散らばる髪・・・私が転校するはめになった事件の光景だ。

「はつきり物を言って何が悪い！ お前らも言いたい事があるなら言えっ！ 影でこそこそ言ってるないで、堂々と胸を張ったらどうだ！？」

そう、あの時も確かそんな事を言った。

「朋花っ！」

・・・結局逃げる結果になってしまった自分が悔しくて、涙がこぼれそうになった時、航の声が聞こえた気がした。

焦燥と傷痕（後書き）

朋花のトラウマスイッチON。

似た状況に反応したって事で。

お話とはいえ、悪役にしちゃった子達に申し訳ないと思ったり・・・
端役に詳細な設定など考えてませんが、勧善懲悪は目指してないの
で、

少し、どうしようかと迷いましたが・・・結局GOです。

隣を歩く(前書き)

ラストです。

とりあえずこれで前半戦終了です。

・・・ではどうぞ。

隣を歩く

各教室を見て回っていると、朋花の叫ぶ声が聞こえた。

あそこは美術室か。

慌てて駆け寄りドアを開けると、三人の女の子と頭を抱えてうずくまる朋花の姿が目に入った。

「朋花っ！」

急いで駆け寄り三人を睨み付けると、感情に任せて怒鳴りつけた。

「お前等、一体何をした？」

「・・・何もしてないよ、ただ為井くんと仲がいいから、それを少し・・・。」

三人は口々にそんな事を言い、小刻みに首を横に振る。

「余計なお世話だ。」

嫌な想像は見事に当たってしまった。

「石川さん気分悪いって、勝手にしゃがんだだけだし・・・。」

彼女の言う通り、朋花は青い顔をして汗だくになっている。

「だけど・・・。」

「まだ何か言い訳があんのか!？」

再び機嫌悪く怒鳴ると、何かを言おうとしていたやつは口をつぐんだ。

「・・・俺も朋花も、もちろん聡太にも迷惑だから止めてくれ。」

呼吸を整え、少し心を落ち着かせてお願いしたつもりなのだが返事は無く、妙に目配せしあって、居心地悪そうにしているばかりだ。

苛つくやつらをもう一度睨み、でも、できるだけ静かに・・・怒鳴らないように気をつけて声を出した。

「今度こういう事があれば・・・次は聡太に言うぞ？」

これは必殺技だ。

好きなやり方じゃないが、有効なのは知ってる。好きな相手に悪い印象で覚えられるのは嫌な事だろう。もちろんこいつらもそうら

しく、三人は再び口々に責任転嫁の言葉をほざきながら慌てて部屋から出て行った。

「朋花、大丈夫か？」

一呼吸置いて朋花に声をかけると、頭を横に振る。逃げていった三人と間に合わなかった自分に再び腹を立てていると、下から弱々しい声がした。

「・・・許可無く抱きつくな、バカ。」

そう言われて初めて抱きかかえている事に気付き、慌てて離れた。

「・・・あ、ああ、悪い、咄嗟の事で、つい・・・。」

・・・少し名残惜しい気がして腕に残る感触を思い出していると、朋花は・・・おそらく涙を拭いて顔を上げた。涙目の疲れたような青い顔をしていたが、それでも笑おうとしていた。

「私は大丈夫だ、嫌な記憶とリンクしただけだから、もう平気・・・。」

気丈にそう言っ、立ち上がりスカートを払った。

「悪かった。」

「何が？」

「聡太絡みで絡まれただろ？」

「それで何で、航が謝るの？」

「・・・前にもあったんだ、こういう事。」

顔を洗おうとしている朋花に、俺はその時の話を簡単に・・・朋花からの相槌が特に無かったので水音をBGNに独り言のように語った。

「聡太・・・それで人とあんまり関わらなくなっちゃった時あつてさ、・・・別に聡太のせいってわけじゃねーのに、それに、今だに人と距離取ってるしな、だから、俺が睨みかかせてたんだが・・・結局、間に合わなかった。」

蛇口を捻る金属の軋む音がして、水音が止まる。

「バカだな、ああいうのは陰でやるものだぞ？」

そう言つて手についた雫を払い、ハンカチで顔を拭き始めた。

「私もこの事話してないし、逆によく気付いて駆けつけてくれたつて。航・・・本当スゴイと思うよ。」

「いや、だけど俺が朋花に声かけて・・・。」

雫のついた髪の毛の向こうに、さっきまでハンカチで隠れていた顔が再び現れ、目が合うと、

「ありがとう。」

朋花はそう言つてにっこりと笑つた。

結局は俺が巻き込んだんだとか、ずっと嫌な視線が向けられたから予感があったとか、色々言いたい事があったのに、朋花の言葉で、笑顔で・・・そのすべて無意味なような気がして、言葉は続かなかつた。

「航は見かけによらず、いいやつだな。」

「・・・見かけて、何だよ。」

あー心臓がドキドキする。笑顔向けられたただけなのに・・・

「複雑じゃないか？ お姉さんを好きな相手守るのって？」

・・・なに？ そっち？ 俺のぬか喜びなのか？

少しガツカリしたのを気付かれないように・・・深呼吸をして気を取り直した。

「知つてんのか？」

「朝に一度話してるとこ見た。あれは分かりやすいね。」

「だろう？」

一度見かけたくらいではれるようなものが、どうして当人に伝わらないのかさっぱり分からない。聡太と同じように毎朝楽しみに行ってみてほしいし、傍から見ても脈が無いとは思えないのだが、ねーちゃんは昔から変わらない。鈍いにも程がある、実はわかつてそのままって事は・・・いや、それは無いな。あのねーちゃんがそんな器用な真似ができるわけが無い。

「で、弟としてはいいのか？」

濡れたハンカチを畳みながら朋花は向きを変え、俺に視線を向けてきた。からかいと好奇心の含まれたそれに、諦めの心境で溜息をこぼした。元気になってくれたのはうれしいけど・・・いきなりそんな事を聞いてくれるか？

・・・無理だな。

惚れた弱みだよなー、あの目には勝てそうに無い。

「・・・正直な所は複雑な気分だけど、聡太は親友だし、もうずーっと飽きずにねーちゃんの事好きなの知ってるからな。・・・まあ、どこの誰だか知らないやつよりはいいんじゃないか？」
と、毎回そう自分に言い聞かせている。

・・・本当に俺、何話してんだ？ 何真面目にそんな事考えてるんだって、どうせ笑うんだろうな・・・そう思っていたんだが、答えは違った。

「・・・すごいな。」

目を丸くして、本気で驚いていた。

「私ならどうだろうって、さっき真面目に考えてみたらさ・・・無理かもしれないってとこに行き着いて、ビックリした。」

朋花も自分ならという事を考えてみたと言う。しかし、その自分の出した答えに不満なのか、認めたくないのか分からないが、面白く無さそうにしている。

「無理って・・・こないだ蹴り倒した、あのジャージの人だろ？」

「あんまり言わないでよ、私も驚いてるんだから。」

あれだけの事をしておいて・・・いや、あれだけの事ができてしまう兄弟愛ってとこだろっか？ 屈折した愛情表現に思わず苦笑が漏れる。

「・・・じゃあ、未来の義兄上のもとに戻ろうか？」

一瞬眉を顰めた朋花は意地悪く言うつと、濡れたハンカチを再び広げてヒラヒラとさせながら歩き出した。

義兄って・・・

「・・・あー、そうはつきり言われると抵抗あんだけど？」

「覚悟決めてるんじゃないのか？」

これは笑った分の仕返しのもりなんだろうか？ 一層意地の悪い笑みを浮かべて振り返り足を止めた。

「そこまではしてない、心積もりだけだ！」

俺、早まった事したかな・・・一瞬そんな事を考えて朋花の後を追いかけて、隣に並ぶと朋花も再び足を動かし始めた。

「くつついたらくつついたで、きつともつと複雑な気分になりそうだね。」

「・・・あのさ、朋花・・・そういうのは、まだ考えたくないから止めてくれない？」

わざわざ逆撫でする事を言って、俺の様子を見ながら笑い声をあげていた朋花がふいに黙り真面目な顔を向けた。

「あ、まさか出て来るのが遅いのって、二人の時間を作ってあげてるから？」

「・・・んあ、な、何の事だ？」

そんな事に気付くなよ、恥ずかしいじゃないか。

「航はいいヤツだなー。」

でも、やっぱり嫌いにはなれないよなー。と、肘で脇腹を突付かれながら向けられた笑顔くらいで思い直している俺がいて、何て単純な男だと苦笑するしか無かった。

「ねえ朋ちゃんごめん。もしかしたら迷惑・・・かけたよね？」

航と家の前で別れて間もなく、聡太くんは私にそう言った。

「何が？」

隣を見ると申し訳ないといった顔をして立ち止まっていた。航がいる時にはまったく触れる事なく、いつも通りに私と航への突っ込みでここまで来てしまったのだが・・・。

「航と戻ってきた時、少し様子が変わったし、探しに行った航も・・・ね、」

航はコツソリやってるつもりみたいだったけど、バレてるみたいだよ？ 聡太くんは聡太くんその航を気遣い、二人になった今を見計らって謝っているって事だろう。

「でも、僕どうしたらいいのか分かんなくって……」

で、人と関わりを持たないように、籠っちゃうのか。だから、放っておけない航が頑張っちゃうんだな……。

まったく、この二人は面白い関係だ。

「気にしない、気にしない、聡太くんは堂々としてればいいんだよ。」

「

弱気な聡太くんに、元気を分けてあげるようなつもりで力一杯言い切った。今の私は航の気持ちがよく分かる。

「……そ、そうかな？」

「そう！ 周りが勝手にやってるだけ。」

だって本当に聡太くんは関係無いからさ。

「でも、巻き込まれる人は？」

もう、しぶといな。

「だったら……いい解決法があるよ？」

「何？」

意味深に言った言葉に、興味を示した聡太くんを手招きして耳打ちした。

「特定の相手がないから、周りが勝手に盛り上がるんだよ。」

「……そんな事言われてもさ、」

「だからー、さっさと航のお姉さんと付き合っちゃえって事。」

「はあっ！？ いや、だって、ほら葵姉は年上だし、僕なんか……って言うか何で朋ちゃん知ってるの？」

途端に顔を赤くした聡太くんは、取り乱して支離滅裂の混乱状態に陥った。

ごめん、航。

複雑なのは重々承知だけど、やっぱりこれが一番の解決法だと思う。

この聡太くんがすぐに動くとは思えないけど、その時は覚悟して
まっせよ？

隣を歩く(後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございました。

もともと転校してきたという設定が何となくあったので、その転校の理由を考えた時、真っ先に思いついたのが「いじめ」でも、朋花の性格上本人がやられても、逃げはしないだろう。という事で、こうなりました。

また重いなあ・・・と、少し躊躇もありましたが、秋くらいには出来た設定なので、
そこまで深く考えてませんでした(オイ)

しかも、羽海野チカ先生の「3月のライオン」が同じ設定で話が進行し始め・・・
ヤングアニマル読むたびに、うわっ、どうしよう!? って本気で思いました。

だから、パクったわけじゃないです!!(ここ重要)

もちろん朋花の台詞はかなり私の本音。

後半戦・・・頑張ります。

今の所の仮タイトルは、「逆転劇。」です。

- 追記 - (2011.05.07)

えーと、BGNがBGMでは? というご指摘を頂いたので書いておこうかなと思ひまして。

BGNで正解です。

バック・グラウンド・ミュージックではなく、

バック・グラウンド・ノイズです。

逆転劇（前書き）

随分間が開きました。

後半戦・・・続きです。

別タイトルで行こうかとも思ったのですが、あらすじが面倒なので

（^^）；

それ以外にも、本当に続きだし、転校前の朋花の話の要約が面倒で
・
・

で、続きを2章としてUPする事にしました。

今日から本編9話と、おまけの聡太くんサイドの話を1話か・・・
長くなり過ぎたら2話に分けてUPです。

本編は上がってるので、明日以降はいつも通り午前10時にお届け
します。

おまけは、今書きかけです。

ではどじょう。

逆転劇

「・・・あのさ、朋花、まだ返事は保留のまんまだよな？」

「あーそういえばそうだね。」

学校からの帰り道、不意に航がそんな話を持ち出してきた。

今の状態が居心地がよくて、ついそのままになっていた。質問攻め
の間で急に告白されてから一ヶ月くらい過ぎたと思う。航も返事を
急かすような事をこれまで一度も言っただけだった。

「言い難いんだけど・・・」

「何？」

あの航が珍しく言い淀んでいる。さすがに返事が聞きたいんだな、
確かに長い事放って置き過ぎた気もする。

『OK、いいよ』って返事を用意して私は航の言葉を待った。

「あのさ、ちょっとキャンセルしていいか？」

「・・・はっ？」

「朋花の事好きなのは変わってないんだけどさ、あの時は俺・・・
お前の事何も知らずに言っちゃったからさ・・・だから、少し時間
くれない？」

「・・・何それ？」

思いもかけない事を言われ、私は足元が崩れて谷底に落ちこちでも
したような・・・そんな状態だ。

「だって、まだ返事してないんだからいいだろ？」

「そういう問題じゃなくて・・・」

私は付き合う前から、ううん、返事をする前に、告白してきた人に
振られるって事？

まったく悪びれた様子も無く、何か物を借りる時くらい感覚で言
われた言葉に、ものすごくショックを受けて私はその場を逃げ出し
た。

「あ、朋花？ ち、ちょっと待て・・・」

航の引き止める声を振り切って、私は家まで走って帰った。

「何で、何でよ！？ 何で今になってキャンセルなんて言い出すの！？」

肩で息をしながら自分の部屋に駆け込み、勢いでカバンをベッドに叩きつけた。

しかし、その反動でベッドの上にあったコンポのリモコンが飛び上がり、床に落ちて電池が飛び散り・・・当たり散らしてもいい事なんか無いぞって、どこかの誰かに言われているような気がして、ガツクリと力が抜け床に座り込んだ。

「何でこうなるの・・・？」

いきなり過ぎて、まだよく分かんないけど、きつと自業自得・・・なんだよね？ きつと私何かやったんだ。

段々航に傾いてる自分に気付いて、航に構って欲しくて色々ちよっかい出してきたから、それかもしれない。その拳げ句がキャンセルさせてくれてんだから、おかしくて仕方ない。今の私は全然笑えないけどさ・・・。

さっさとOKしとけばよかっただけなのに、今となっては後の祭りです。もうどうにもならない。

カバンを床に引きずり下ろして、布団に倒れ込んで突っ伏した。制服に余計なシワが入ったり、白くなったりしそっただけど、何か今はどうでもいい。このまま寝ちゃって、起きたらすべて夢でしたって事になってたらいいのに・・・

でもそんな事はある得なくて、眠れもせず、後悔に苛まれたまま時間だけが過ぎ、下から夕飯を告げるお母さんの声が聞こえた。

朋花が走って行った後、突然後ろからどつかれた。

「つか、蹴ったな！？」

「航、お前何してんだ!？」

聡太にしては珍しく大きな声だ。しかも怒っているらしい。

「痛いな・・・、何すんだ?」

「何じゃない、お前こそ正気か? キャンセルってどういう気だ?」
振り向くと怖い顔なんかじゃなくて、逆に表情がよく分らないくらいでかなり驚いた。からかうと嫌な顔したり睨んでくるけど、ひよっとしてこれは、そういうのを突き抜けた状態なのか? だとしたら、こいつがここまで怒ったのは見た事が無い。

「・・・ああ、それが。やり直したかったんだ。」

「何を?」

「何って、告白自体をだよ。」

「何で?」

「・・・言つたる? 朋花の事何も知らないで勢いで言っちゃったから、よく朋花の事を知つたうえで、改めて告白し直したかったんだ。だから、朋花の事を知る時間が欲しかったんだけど・・・。」
聡太は右手で顔の半分を押さえて頂垂れた。さっきまでの怒りはどこかへ行ってしまったらしく、いつもの見慣れた聡太に戻って眉をしかめている。

「・・・見事に誰にも伝わってないぞ、それ。」

「途中で逃げられたしな・・・。」

「違う。・・・あのさ航、それはとっても航らしいと思うんだけど、バカ正直にキャンセルなんて言わなくてもいいと思うんだけど?」

「そうか?」

「そうだ! 現に今。朋ちゃん傷つけただろ?」

「ん・・・そうみたいだよな・・・参ったな。」

俺は、こうなるなんて思ってもみなかった。

軽々しく告白してしまった事が申し訳なくて、俺の知らない朋花もどうにかしてやりたくて、全部まとめて任せとけ!・・・って言えるように、前の学校での事を聞きたかったんだが、それ所じゃなくなつたな。

「・・・参ったって、ちゃんと先の事考える。そうしないと次無いぞ。このまま朋ちゃんに嫌われて、これでお仕舞い。航、残念でし
た〜って?」

聡太はふざけた口調で恐ろしい事を言う。その内容に俺は本気で血の気が引いた。

「マジか!? そりゃ困る。」

「短絡的。・・・その時その時の気分で決めてないで、たまにはに本気で考える。」

指を突きつけて、俺に念を押しした聡太は、急に向きを変えると先を歩き始めた。

「・・・いや、今回は俺、よく考えたつもりだったんだけどな。」

まったく何で今? どうして今、あんな事を言い出すんだ航は?

朋ちゃん、絶対航の事好きになってきてたのに。後ろから見てたらそれが一目瞭然で・・・ショックだろうな。

僕としても、三人でいるのが当たり前になってしまった今、このままバラバラになってしまふのは嫌だ。間に挟まれて気まずい思いをし続けるのは、もつと御免被りたい。

という事は、今僕はあるの二人の仲直りに尽力するしかない・・・という事になる。

「・・・さて、どうしたものか。」

朋ちゃんの気持ちに微塵も気づいてもいない航に、それをはつきり伝えたら、ルール違反だつてきつと朋ちゃんは怒るだろう・・・そもそも僕が伝える事じゃない。

朋ちゃんに航の考えを伝えるのは癪だ。ああいう考え無しな行動を今後改めてもらうためにも、今は十分考えて自分でどうにかして欲しい。

とは言え、板挟みの状態は好ましくない。

秋から冬に変わりかけの幾分暗くなつた道を一人で歩きながら、前

途多難な先を考えている自分に溜息を吐いた。

自分の事もどうにもできずにいるのに、どうして人の恋路に手を出さなければならぬのか・・・その今の状況を周りのもの全てに笑われているような気がして、もう一度溜息を吐いた。

逆転劇（後書き）

途中で手放した事を本気で後悔。

区切らなければ、朋花の過去は本人の回想じゃなくて、
兄貴の和樹に語らせたのにー！！

お伺い？（前書き）

9 話目です。

・・・ひびきひびき。

お伺い？

「・・・お兄ちゃん、何回溜め息吐いたら気が済むの？もう、鬱陶しいから止めてくんない？」

対角線に位置する席で食事をする妹が、うるんな視線を投げつけてくる。

「悪い、理佐。」

今日も両親は仕事で遅い。母さんはフレックスタイムで会社時間をずらし、朝のうちに色々と家事を済ませてしまうので、その分帰りが遅い。でもこうして僕達の夕食を冷蔵庫に残しておいてくれていく。だから平日は妹と二人でこつこつやって夕飯を済ます事が多い。

ただ最近はやたらと一方的に疎まれ、あまり会話も無くテレビの音が響いているばかりだ。しかも今日はこれといった番組も無い。二人つきりで、目障りな人物の溜め息ばかり聞かされては確かに鬱陶しいだろうな。

・・・って、自分でこんな分析をしてると余計虚しくなる。

「で？ 今は何悩んでんの？」

おかしな事に妹は、無理やりな上から目線で一丁前に人生相談に応じようとしているらしい。今までこんな事を言い出した事は無かった。ちなみに、逆に相談されたような覚えも無い。

「あー、お兄ちゃんひどい！ せつかく私が話聞いてあげようって思ったのに！・・・もう、知らない、勝手に一人で悩んでれば！？」
吹き出すのは堪えたけれど、笑ったのはバレてしまったらしい。割れるんじゃないかってくらい勢いで茶碗をテーブルに置いて、そつぽを向いてしまった。

「・・・悪い、理佐が珍しい事言い出すからさ。」

「お兄ちゃんが暗いから！・・・みんな外見に騙され過ぎよ。本当はこんなにウジウジで面倒なのに・・・」

一つ違いの妹は、一切兄に敬意を抱いていない。それは薄々分かつ

ていたけど、こつも面と向かつてはつきり言われると、かなり堪える。

「うるさい、僕は誰も騙してるつもりはない。人を詐欺師みたいに言うな。」

「だって、絶対航兄ちゃんの方が男前だよ?」

航? いいやつだし、ああ見えて実はかなり色々気を回すし、僕より確実に運動神経はいい・・・だが、そこはあえてコメントしないでおく。

「・・・今回は僕の事じゃなくて、その航の問題。」

「えっ、何々どんな問題?」

僕の悩みだと思っていた時よりも、明らかに興味を示す妹に複雑な思いを抱きながら、事の次第を説明した。

「そういうのはさー、お伺いたててみようか?」

「はっ? お伺いつて何?」

僕の質問は無視され、妹は携帯を取り出して、文面らしき事をブツブツ呟きながらメールを打っている。

「送信!」

そんな必要も無いのに携帯を上に掲げてボタンを押す妹から、僕は意図的に目を逸らした。そのポーズに意味は無いだろ? そう突っ込みたくてたまらないが、そんな事をするとう倍くらい憎まれ口が返ってくるのは確実なので、見なかったフリを選ぶ事にした。

「これで何かいい解決策が返ってくると思うよ?」

予想外の笑顔を見せる、妹に驚いた僕は、

「・・・ああ、そう。」

としか言葉が出てこなかったのだが、それが不満だったのか、妹はいつもの見慣れた不機嫌そうな表情に戻ってしまった。

風呂上がりによたら機嫌のいい妹に捕まった。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、返事来た。」

抑えきれない感情が溢れて、それが面に出ているのだが・・・結局誰に送って、誰から返事が戻ってきたのかは分からないままだ。

「何て書いてある？」

濡れた髪をタオルで拭きながら聞くと手招きするので、ソファに座る理佐の隣に座った。何も言わない。更に意外な事に携帯ごと渡されて、隣でクスクス笑っている。

「なあ・・・何か嵌めようとしてないか？」

違和感だらけの状況に、そうこぼすと、

「いいから早く読んでよ。」

と、急かされ、仕方なく携帯の画面に目をやるが既に省電のために黒くなっていた。適当にボタンを押して復帰させると、そこには僕の問いの答が表示されていた。

- - - - -
- - - - -

From 美晴さん

Sb 人生相談って言われてもな・・・

どうも何も、それはもう付き合っ
てしまえばいいだけだと思っただけ
か？
航が何知りたいたいのか分かんない
けど、
何もしなくていいんじゃない？たぶん
勝手に丸く収まるよ。

で、理佐ちゃんの兄貴も、人の事
で思
い悩んでないで、自分の事頑張
れ
て
伝
え
て

- - - - -
- - - - -

「・・・理佐は美晴さんと仲いいのか？」

「うん、尊敬してる。」

やたらとキラキラした目をする妹に、僕は無言で携帯を返した。正しくはかける言葉が見つからなかった。僕も美晴さんの事は・・・たぶん、よく知ってるけど、あの人に感化されたり、影響されるのは歓迎したくない。

美晴さんは葵姉と仲がよくて、僕も小さい頃から付き合がある。基本的にいい人なのだが、信用し過ぎると痛い目を見るはめになる。時々ものすごい行動力で大掛かりなイタズラを仕掛けてくる事があるのだ。そのための努力を、あの人は一切いとわない。

僕も航も葵姉もその被害者で、僕としては少々距離を取りたい人物だ。でも、葵姉はそれでも親友であり続けていて、それが僕には不思議でならない。

・・・うん、悪い人ではないんだけどさ。

「ただいま」

玄関が開く音がして母さんの声が出た。

もう帰ってくる時間なのかと、壁の時計を見ると8時40分を指していた。ちなみに父さんはもう少し遅く9時より前に帰って来る事は、まず無い。

リビングに入ってくるなり母さんは、僕達の姿を見て笑った。

「二人揃って並んでるなんて珍しいわね、そんな仲良さそうなどこ久し振りで、いいもの見た気分だわ。」

少し嬉しそうに言い、脱いだ上着をイスに掛け流しに向かった。

「お母さんひどーい。別に仲いいわけじゃないもん、たまたまだもん、たまたま！」

妹は口を尖らせながらあっさりと僕の横から消え、母さんの所に行ってしまった。

そんな様子見ながら、母さんは再びおかしそうに笑っていた。

その笑いには、すねた妹だけじゃなく、何となくガツカリした僕の事もきつと含まれているんだろう。

お伺い？（後書き）

やっぱり狂言回しが出てこないと話が進みません。

って言うか「不思議な人。」でいいくらいにメールの話が出てたので利用。

でてる事(前巻)

10話目。

・・・

できる事

朝、朋花はうちに来なかった。

『これでお仕舞い』聡太が昨日言っていた言葉が、頭の中で木霊する。考えれば考えるほど時間を戻したくて仕方が無い。あーもう、何て馬鹿なんだ、あの時の俺！？

一方、隣を歩く聡太は普段と変わった様子も無く、飄々として朋花がいない事に何の疑問も抱いていないようだ。

「・・・なあ、俺やつちやつたかなあ？」

「そうだね。」

簡潔に即答された応えは、取り付く島も無い。

「朋花・・・来なかったな。」

「当然だね。」

良過ぎるテンポで帰ってくる短い言葉は、俺の心に深く鋭く突き刺さる。

「聡太・・・どうしたらいいと思う？」

「僕を頼るな、自分で考えろ。」

・・・違う。これは普段とは全く違う。飄々としてるんじゃないかって怒ってるんだ。ああ、俺には継る所も無いのか？ その後も何度か聡太に話しかけたが、痛い言葉しか戻って来ないので諦めて口を閉じる事にした。

朝、航の家には行かなかった。

行けるわけが無い。キャンセルなんて言われたんだ、私はきつと航に嫌われるような事をしたんだ。謝って元の関係に戻りたい。

・・・でも、何て謝ればいいんだろう？ ちゃんとどこが悪かったのか自分でよく分かってもないのに、表面だけ謝っても今迄のよくな関係でいられるとは思えない。

・・・バカだな、私。

学校で、航が何度か声をかけようとしてきたけど……私はずっと逃げ続けた。

朋花とは話ができない。捕まえようとしても逃げられる……困った。

でも、これは自業自得だ。だから今は最初の問題を片付ける事にした。そもその理由『朋花の事を知りたい』だ。普段強気の朋花がどうしてあんなにパニックに陥ったのか、その理由を……前に質問しても答えてくれなかった、転校前の事を知りたい。担任の皆川ちゃんなら何か知ってんじゃないかって、昼休みに職員室に行ってみた。

あつよかった、よかった。皆川ちゃんは自分の席で、食べ終わった弁当のフタを閉めていた。タイミングはいい感じだな。

「皆川ちゃん、話あんだけどー。」

「先生をそんな風に呼ぶなって、いつも言ってるでしょ。」

「気にすんな。」

「します。」

青筋立てそうな皆川ちゃんの様子と、他の先生までこっちに注目してるのに気付いて、これ以上苛つかせるのは止めて本題を切り出した。

「で、先生、朋花……石川さんが転校してきた理由をご存知ありませんか？」

急な切り替えに皆川ちゃんは一瞬ついて来れなかったが、俺の質問に渋い顔をした。よし、これなら知ってるな。

「安田くんどうしたの？」

交渉の技術なんか持ってない。状況証拠しかこっちには無い。どれだけ引き出せるかは、俺の口先にかかっている。

「前に、女の子数人に呼び出されて、パニック起こしかけてたんです。俺が止めに入って収めたんですけど……石川さんの様子が引

つかかって、」

「そう、そんな事があったの・・・ありがとね、安田くん。」
よし一枚突破。

「いえ、友達ですから。」

「そうね、君達仲良いみたいだよね、転校してすぐは浮いてたみたいだから、先生心配してたんだけど・・・。」

実はこの先生結構熱血で、こういうのに弱いんだ。理想を押し付けてこようとするのはどうにかして欲しいんだけど。

「ハッキリしたい子だと思いますよ？」

「ええ、そうね、でもそういうのは裏目に出る事もあるのよね・・・いい友達ができて先生は嬉しいわ。でもごめんね。」

「でも・・・、」

教えてくださいと続ける前に、皆川ちゃんは優しく・・・でもきっぱりと俺の口を塞いだ。

「こういうプライバシーに関する話はやっぱり言っちゃ駄目だと思うから、また何かあったら教えて。」

「・・・そっか、先生ありがと。」

「安田くんもありがとね。」

・・・くそつ駄目か。

俺じゃ無理か？ やっぱ単純に真正面から行っても無理なんだな・・・聡太なら上手い事聞きだせるかな？

いや、でも・・・あの理由をあいっつに言うわけにもな・・・困ったな。

職員室から出て教室に向かいながら、他に手段は無いものかと、もう一度考えてみた。

できる事（後書き）

どこかに書いた気がしますが、今回難航しまして、

二回破棄した、三度目の正直？なんですが、

この話の一部分は、破棄した一作目からリサイクル。

部外者の焦燥（前書き）

11 話目です。

・・・ひねひね。

部外者の焦燥

帰りも朋ちゃんはや姿を消した。そして航は上の空だった。これで本当に丸く収まるのか？僕には美晴さんの考えてる事が、さっぱり分からない。

「理佐、頼みがあるんだけど。」

家に帰って、携帯片手にソファに転がっていた妹にそう言った。

「お兄ちゃんが私に？・・・一体何？」

妹は僕を不思議そうに眺めてきた。・・・確かに僕でも同じ反応を返すだろう。昨日の妹の行動に僕も同じように戸惑った。

「美晴さんにメールして欲しいんだけど。」

「・・・何て？」

「僕にできることないかって。」

「航兄ちゃんの事？」

「そう。」

「それってさー、きっと長くなるよね？ 美晴さんのアドレス教えるから、自分のでやりなよ。」

拒絶だな・・・兄に付き合うのはそんなに嫌なのか？ でも妹の提案には乗れない。

「・・・それは、あの人にアドレス知られるのは、何か嫌だ。」

「失礼だなー、ひどーい。」

「・・・理佐は、あの人の恐ろしさを知らないんだよ。」

「お兄ちゃんこそ、あの人の事何も知らないんだよ！」

もの凄い速さで反論され、少し睨み合う事になったが、それでも妹は仕方ないといった様子で、僕に携帯を渡してきた、

「好きに使って。」

そう言っただけは反対側の床に座り込み、柔軟体操を始めた。

・・・これは最近の日課らしい。

- - -
- - -
T o 美晴さん
S b 教えて下さい

航達の事なんです、本当に僕にできる事ないんですか？
- - -
- - -
- - -

少しして返事が返ってきた。

- - -
- - -
F r o m 美晴さん
S b R e . R e . 教えて下さい

聡太くん？
できる事っていつか、手を出しちゃう目だよ？間に挟まれて大変かもしれないけど、それは当人同士の問題！部外者が勝手に首突っ込んじゃ駄目。

- - -
- - -
T o 美晴さん
S b R e . R e . 教えて下さい

そういわれても、行き違い起こしてるだけみたいだから、周りから働きかければまとまらないかなって思っんですか？

.....

返事を待っていると急に携帯が鳴った。妹がこっちを気にしたが、表示された名前は美晴さんなのでそのまま何も言わず勝手に出た。

「聡太くん。直接話そう・・・文字打つのが面倒になった。」

「はあ、」

「あのね、とにかく駄目なの。喧嘩は思いっきりやっつく方がいいの。」

その声はいい含めるようで、自信にあふれた説得力があり驚いた。

「でも、喧嘩にもなってますんよ？ 朋ちゃん逃げちゃうし、航は捕まえられないしで、話なんかしてませんよ？」

「でもじゃない、それは聡太くんが部外者だから分からないだけ。

聡太くんなら喧嘩したくない人と喧嘩しちゃって、でも理由が分からなかったらどうする？」

「そりゃ、何が悪かったのか考えますよ。」

「うん。じゃあ、逆に怒らせる気がないのに怒らせちゃって、逃げる相手を無理やり捕まえてでも謝る？」

「・・・それも違うかな、」

「ほら、そういう事。いくら航だって何か考えてるよ。それに、ズレがあったなら、それは早いうちに修正した方がいい。自分達で気付けて、自分達でどうにかするのが一番いいの、分かる？」

「・・・理屈としては。」

「そう、理屈なんだ。変な見栄で誤魔化したり、人任せにして終わった気になってると、結局ズレはそのまんま広がって取り返しのつかない事になるんだよ。だからそんな時には真剣に向き合っとくべ

きな。きつと・・・。」

「きつと？ 最後あやふやですね？」

『理屈だつて言つたる？ 理想つて置き換えでもっていいけど・・・』

・そもそも私に相談するのが間違いなんだ。』

「そうなんですか？」

『そつだよ。理屈ならいくらでもこねるけど、私、経験からは何も語れないよ？』

「でも、自信に満ちた答えが返ってくるから結構安心感ありますよ。」

『・・・そう？ 役に立つならいいんだけどね。』

僕の負けらしい。

妹の言う事は一理ある。確かに僕は美晴さんの事を何も知らなかつたらしい・・・人事なのに、ここまで真面目に考え、真摯に答えてくれた事は驚きだつた。

いや、距離を置きたい人物に相談してる時点で、既に負けているような気がする。弟の事を姉に・・・というのも酷な気がするし、だからといって他に相談するような人物に心当たりが無いというのが正直な話だ。

電話を終え、液晶部分を軽く拭いてから礼を添えて携帯を理佐に返すと、即刻その場で丹念に拭かれた。

「やっぱりアドレスと番号渡す。お兄ちゃんの携帯貸して。」
何か携帯を操作しながら左手を僕の方へ伸ばしてくる。

・・・さっきの行動といい、今の迷惑そうに眉をしかめてる姿はかなり傷つく。それでもポケットから携帯を出して渡すと僕の携帯も操作し、両方の赤外線ポートを合わせた。

でも、美晴さんに僕のアドレスを知られる事は、今はそんなに嫌じゃない。

部外者の焦燥（後書き）

私の書く妹キャラが強いのは、きつとうちの子供たちのせいです。
私の書く男の子が弱いのも、きつとうちの子供たちのせいです。

関係者の焦燥（前書き）

12話目です。

・・・ではさしあげ。

関係者の焦燥

今朝もやっぱり二人だった。

聡太に昨日皆川ちゃんのとこに行った事を話した。もちろん、聡太に關係しそうな所は微妙にぼかして話したんだが、聡太は何も聞かずに頷いた。・・・あれ？ ひよっとしてばれてるのか？

・・・とにかく、ああいう状況になると朋花はパニックを起こす。きつとそれは前の学校に原因があつて、それを知りたい。でも皆川ちゃんは教えてくれなかった。俺もそれをきちんと知るまでは、朋花と真正面から向き合う事ができない・・・できないのは朋花の方なんだが・・・もちろん俺は何でもOKだ。でも、朋花に後ろめたい思いをさせたままってのは何か嫌だ。

・・・と、真剣に語つたつもりだったが、聡太は笑つた。

あれ？ 俺何かおかしな事言つたか???

「こつちの事。航、頑張れ。」

そうエールを送られただけだった。当てにすんなつて事か？

学校が終わつて朋花はあつという間にいなくなり、聡太も用事ができたと言つてさっさと消えてしまった。

俺はと言えば、その後運悪く皆川ちゃんに捕まり、数学の時間に寝てた事の小言を聞かされて・・・ようやく帰り始めた時には、既に空にはオレンジ色が混じっていた。

一人でトボトボと歩き、もう少しで家につくつて辺りで自転車とぶつかりそうになった。ここまでついてないのか俺!?

「ごめんっ！ 大丈夫かい？」

「いや、こつちこそあんま前見て無かつ・・・。」

そう、まあ確かに下ばっか見て前見てなかった。

よく見ると見覚えがあつて、聞き覚えもある声で・・・

「あーっ、朋花の兄ちゃん!？」

大声を出すと、向こうも気付いたらしく。

「ああ妹の友達か? . . . 君、あんまり妹の事呼び捨てにしないでくれるかな . . . ?」

先程の心配した様子からは表情と声が一変し、引きつった顔で睨んでくる。

「 . . . じゃ、朋花 . . . さんのお兄さん、俺はこれで。」

怖い顔する危ない人から一刻も早く離れようと . . . 以前、妹に路上で蹴り倒された姿はそうそう忘れられるものじゃない。その原因が妹を尾行つてんだから、相当に怪しい。いくら好きな子の兄でも . . . いや、だからか?

俺、本能的に避けようとしてんのかな . . .

何か言つてたような気がしたけど、振り返りもせず走って逃げた。

どうも最近妹の元気が無い。無意味に絡んできて悪態をつく事も、話しかけると3倍返し位の非難も . . . 一時は10倍ぐらいあったのが減つたのは、有り難かつたんだが、それが今は気のない返事や無言に変わってしまった。

「なあ、朋花 . . . 大丈夫か?」

「 . . . 別に。」

何が別に! ? . . . なあ、お兄ちゃんとっても気にして、心配してんだぞ? ? ? ?

「何かあつたんじゃないのか? 学校は楽しいか?」

「 . . . それなり。私もう部屋戻る。」

結局ものすごい低いテンションのまま逃げられて、一人やきもきする俺が廊下に残される . . . と。ここ数日はいつもこのパターンだ . . . あいつ何か知ってねーかな?

今日ぶつかりそうになった、妹を呼び捨てにする無礼でムカつくヤツを思い浮かべた。

「昨日さ、あの朋花の兄ちゃんにあったぞ。」

「はっ？どこで？」

驚く聡太を横目に、俺はすぐ手前の角を指差した。

「そこ、その角で自転車の兄ちゃんとぶつかりそうになった。」

「で？」

「あ？ 朋花の兄ちゃんって叫んだら、妹呼び捨てにすんなって怒られた。」

「そうじゃなくて・・・。転校する前の事は聞いてないのか？」

そっか、その手があったか・・・俺は咄嗟に逃げる事しか考えてなかった。

「聞いてない・・・そうだよな、絶対知ってるよな、そーいや。」

「次会えたら聞いてみる。素直に教えてもらえるかは分からないけど、朋ちゃんの態度が学校と同じなら、向こうも理由知りたーいんじゃないか？」

・・・交換条件ってやつか。

「そーうまーくいくかなあ？ 怒らせた理由話すと、怒られそーな気がすんだけと？」

呼び捨てにするくらいで睨んでくるんだ。泣かせたのが知れたら、シメられそーな気がする。

「そこは、航の腕の見せ所。バカ正直だけが手段じゃないぞ。美術室の一件でもいいんじゃないか？」

「そっか、それならいけるな。うっしや、会えたらやってみる。」

昨日と同じくらい時間に、同じ場所で待ってみたけど、朋花の兄ちゃんとは出会えなかった。

そして、この何もできない状態の、もやもやした状態のまま土日の休みを過ごす事になった・・・。

関係者の焦燥（後書き）

この話から、聡太くん分岐始まります。
最初の前書きや、活動報告に書いた「おまけ」です。

好きだからこそ（前書き）

13 話目です。

・・・ひまわりです。

好きだからこそ

物足りない。

以前は平気で・・・一人で歩いていた事だつてあるのに、今は何か寂しい。

学校までの道をぼんやり歩いていると、ついそんな事を考えてしまう。別に無理して友達作ろうなんて思って無いけど・・・って、こういう態度が駄目だったのかな？ 全部否定するような人をバカにする態度が駄目なのかな？ 考えてみれば酷いよね・・・段々私のそういう所が鼻につくようになって、キャンセルなんて事になったのかな？

考えれば考えるほど、段々自分が嫌いになっていく。

・・・嫌だな、こうなの。

数日前の自分なら、こんな性格に人間は侮蔑の対象で、嫌いだとばつさり切り捨てているだろう。でも今は自分がそんな人間になっている。それがとても腹立たしく、でもどうにもできずとても歯痒い。しかし、だからと言って今考えてる事をすべて捨てて、結局何も変わらず元の自分に戻るのは絶対に嫌だ。

「朋ちゃん。」

航と一緒にいると逃げられるので、航に「お前は来るな！」と言い置いてやつと朋ちゃんを捕まえる事ができた。

久しぶりにまともに見た朋ちゃんは、目を伏せ視線を合わせようともせずオドオドしていた。元気で、勝気で、少々強引な、いつもの・・・僕の知っている朋ちゃんでは無かった事にかなりの衝撃を受けた。

「・・・聡太くん、何？・・・航の話なら聞かないよ。」

顔を背けて頑なな態度を見せ、今僕が朋ちゃんの腕を掴んでなけれ

ば、確実に逃げ出しているだろう。

「とりあえず、僕と一緒に帰ろう。航は来ないから心配しなくていいよ。」

朋ちゃんは一瞬何かを考えたみたいだけど、首を縦に振ってくれたよかった。これで朋ちゃんの様子も探れる。

「何か変な感じ。この辺を二人で歩くなんて初めてなんじゃない？朋ちゃんはくすぐったそうに言って、細く笑った。

「僕も変な感じだ。もう何年も航と一緒にだからな・・・ああ、でも三人になって、最近はそれが当たり前になってきてたから、朋ちゃんと二人って、不思議な感じ。」

やたらと元気な航は病欠も無く、三人で行き帰りをするようになってから、欠けた事が無い。ただそれだけのつもりだったのだが、朋ちゃんの機嫌を損ねた。

「ひどっ、私じゃ不満？」

「そうじゃなくて・・・。」

話そうと思っている事をまだ何にも話して無いのにまずい。そう思っただけで慌てたけれど、

「なーんてね。」

・・・見事にやられた。

「うん、それでこそ朋ちゃんだよ。」

「聡太くん？」

満足して笑い出した僕に、朋ちゃんは首をかしげている。

「だってさっきまでの朋ちゃんは別人だよ？ 強気に何でも断言するのが朋ちゃんだよ。オドオドして逃げ回ってるのは、らしくない。」

「らしくないって・・・でも私、航にいっぱい酷い事言ったりしちゃったから、だからこうなっちゃったんだよ！ 謝っても今迄と何も変わらなかったら、きつとまた同じ事するし、でも、そうした

くないからどうにかしなきゃいけないのは分かってるけど……どうすればいいのか分かんないんだもん……。」

さつき、少しだけ笑顔に戻った顔は再び凍りついて、今は感情的に内面を晒して……最後はもう泣いていた。

これ航に言ったらきつと首絞められるな。俺の朋花を泣かすな！つて、でも、そんな想いは見事に伝わってなくて……だから、今朋ちゃんは泣いている。

……つて事は、結局泣かせてるのは航だな。

やっぱり、掛け違ってるボタンを見つけてしまった僕が、それをちゃんと指摘してやるべきなんだろうな。

本人達が自分で直せるように、気付かせてやるくらいは部外者がやつても問題ないよね？ 美晴さんのやり取りを頭に思い浮かべ、自分に言い訳をした。大丈夫、このくらいなら裏目に出る事も、でしゃばったわけでもない……きっと。

「朋ちゃん……航には僕以上のからかい方するよね？ 好きな子にちよっかいかけたい気持ちは分からなくもないけど、そんなに落ち込むんなら程々にしとこうよ。」

「……なっ!？」

急に真っ赤になって足を止めてしまった朋ちゃんの姿が、予想通りでおかしくて、安心して、笑いが堪えきれなかった。

「何で知ってるの!？」

「バレバレ。そのくらい見てたら分かるよ。でもさ、ちよっかい出すより口で伝えた方が賢明だと思うな。航はバカだから、そういうのはつきり言わないと気付かないよ?」

「……そ、聡太くんにそんな事言われると思わなかった。仕返しのつもり?」

驚いた後はいかにも心外そうな様子で、涙を手でぬぐった。

ああそうか、確かに以前の仕返しみたいだなこれ。

その時も学校の帰り道で、二人だけで、朋ちゃんに葵姉の事を言い当てられた。それと似たような状況だけど今の立場は逆だ。

「人の事なら言えるよ。」

「・・・聡太くんも頑張ったら？」

朋ちゃんも同じ事を思ってたらしく、一矢報いようとしてきたので、僕は曖昧な笑みを浮かべるしか無かった。

「それは別の話。」

好きだからこそ（後書き）

あれ？ すごく短い。

毎度ながらサブタイトル、悩みます。

好きだから(前書き)

14話目です。

・・・ひまわりんね。

好きだから

聡太に来るなと言われ置いて帰られたが、俺にもやる事がある。

今日こそ朋花の兄ちゃんに会ってやる。いつ帰ってくるかは分かんねーけど、家の近所で待ち構えてたら絶対会えるだろう。こうなったら持久戦覚悟だ。

そして、待ち始めてから2時間半か3時間くらい過ぎた頃になって、やっとそれらしい自転車がやってきた。

「最近元気が無いんだが、その理由……」

「だよな、そつちももちろん朋花……さんが転校する前の事、当然知ってるよな？」

近くの公園の、日が傾いてかなり冷え込んだベンチの側の街灯下で、お互い斜めに向き合う形に陣取って、お互いに朋花の事を聞きだそうとしている。

俺がこの兄ちゃんを待ってたのと同じように、向こうも俺を探していたらしく、ほぼ同時に片手を上げて「あー、話があるんだけど……」って異口同音に喋った。

それから一瞬お互いを睨んで、同時に作り笑顔になった。

「君は朋花と仲がいいんだよな？」

「お兄さんこそ朋花の事なら何でも知ってるよな？」

しばらく無言で、互いの出方を探りあって……道端でする話でもないよなあって、公園に場所を移すことになりここにいる。

「……転校前の事が何か関係あるのか？」

なぜかこいつは言いたくない事を聞きだそうとしてくる。弱味でも握る気か？

「直接は関係無いけどさ、けどそれでちょい前に朋花が大変な事に

なっただけけど・・・それ知りたくないか？」

最初から何か気に入らなかつたが、こいつ本気でム力つく。目は真剣で気になる事言ってくるんだが・・・この失礼千万な物言いが我慢ならない。妙な駆け引きしてきやがって・・・聞きたいに決まってるんだろ、この野郎。

「お前の言い方が気に入らない！ お前には年上に対する敬意は無いのか？ 妹の事呼び捨てにするなって前にも言っただろ？ それとお前に『お兄さん』なんて言われると、虫唾が走るから止める。」

苛つく事を順番に勢いで言ってしまうと、ヤツは溜息をついた。

「じゃあ、聞かないって事だな？」

その投げやりな声を聞いて、俺は即座に反応してしまった。

「待って待って、それは聞きたい。」

・・・何自分から負けに行つてんだ俺？

「あ？ じゃあ転校前の事先に話してくれよ。そしたらたぶん色々納得いくから。」

こいつ絶対そのうちシメる。

「・・・一つ聞いていいか？」

何が納得なのか？ 何でこんなに朋花の事を気にしてるのか？ ・ ・ ・ 当たつて欲しくない予測はあるが・・・理由がはつきりしないのに、んな家の重大事項を他人に話せるかっての。特に、こんな気に入らないやつにだ。

「何でって・・・」

「・・・もし好奇心だつてんなら、何も話さんぞ。」

考え込んで言いよどんだ所にきつぱりと言い放つと。急にまた真剣な目を向けてきた。

「違う、そんなんじゃない。俺は心配してるんだ・・・周りを拒絶して、教室ですつと浮いてるあいつが心配なんだ。」

拳を握り締めて、俺の目から視線を外そうとしない。そんな姿は俺の嫌な予測を確信に変える。だからといって、こいつが気に入ったわけではないが・・・むしろ余計に気に入らない。

「やっぱり浮いてんのか……。で、聞いてどうする気だ？」

「今は分かんねー、でも、いい方法が無いか探せればいいと思ってる。」

バカ正直のナイト気取り。過保護な俺に勝るとも劣らない、ムカつく朋花への想い。

でもそれ故に、こいつは絶対的に朋花の味方か。

一つ大きく溜息を吐いて、覚悟を決めた。

「分かった……。話してやる。」

……。

目の前の人物から語られた言葉に……。予想よりきついその内容に、正直かなり驚いた。

「……。そつか、だからか。」

俺はその話を聞きながら、プラモが組みあがっていくように、段々と朋花の態度と行動の理由を理解した。

人に迷惑をかないように距離を取ってる聡太の防御壁なんかとは規模が違う。完全に人間不信なんじゃないか？俺の手に余るような問題の大きさに、いきなり手詰まりになりそうだ……。だけど朋花は強い。きつと何か方法があると思う。

「一人で納得すんな、次はお前だ。さつさと話せ。」

乱暴な声に顔を上げると、上からの光で迫力を増した睨みを向けられていた。

……。

「そんな事があったのか。」

家では暴れたものの、そんな様子は無かった。

似たような状況になるとパニックを起こすのか？それを助けてくれたのなら、こいつには感謝しなければならぬ……。かなり癪だが。

「不本意だが・・・君等がいてくれてよかった・・・とは思う。」
「・・・友達だからな。」

ぎりぎりの礼に対するやつ態度が・・・ニツと笑うその無邪気さが更に癢に触る。

「調子に乗るな。」

苛ついてる心のままに、つい足元の小石を蹴り飛ばした。お互いに朋花が大事だという共通の理由はあるが、俺はこいつを好きにはなれない・・・こいつ？

「あ、そうだ、お前名前は？」

「あ？・・・言っただけ？ 俺、安田航ってんだ。」

「安田か・・・俺は、石川和樹だ。」

「おう、朋花から聞いている。」

やっぱりこいつ、ムカツク。

「・・・だから、呼び捨てにするな。で？ 安田・・・今、朋花の元気が無い理由ってのは何だ？」

「うぐつ、あー、それは俺と・・・喧嘩中？ だから・・・。」

今まであんなに、腹立たしいほどはつきり話していたやつが、いきなり気まずそうに目を逸らし、言いにくそうにし始めた。

「はあつ？ お前と喧嘩したくらいであんなになるか！？」

「・・・現になってんだから、仕方ねーだろ！？」

マジかよ・・・今、こいつの事が更に嫌いになった。

「俺もこんなとこ話もできてねーから、仲直りもできねーし。」

「で、喧嘩の原因は？」

「・・・言いたくない。」

「ふーん、じゃあ朋花に告白したってのはお前か？」

以前に朋花が言っただけをはつきり言っただけで、明らかに動揺し、わざとらしくすつ呆けやがった。

「・・・な、何の事でしょう？」

やっぱりこいつ気に入らねえっ！！

好きだから（後書き）

「……………」の部分は、前編読んで下さい。

前半で手放さなければ、ここで朋花の転校の顛末を和樹に語らせたのに！！

って部分です。

何度も書くのもあれなので、きれいさっぱり割愛しております。

ご了承下さいませ。

大事だからこそ（前書き）

15話目です。

・・・ではおしま。

大事だからこそ

私はベッドの上で壁にもたれ、膝を抱えていた。

普段ならずつと流しっぱなしの洋楽や、ロックも最近さっぱり聞いてない。全然そんな気分にはなれないから。

ここ最近、学校から帰ってやる事だけ事務的にやってしまうと、後は段々と暗くなっていく部屋で、灯りも点けずにこうやって、今までの自分を反省していた。

最初のうちは航に対しての怒りが少しはあったけど、段々落ち着いてくると、自分の何が悪くてこうなったのかを延々と考え続けた。そうすると思えば当たる事があまりにも有り過ぎて、航に見捨てられても仕方がなかったんだなと・・・落ち込んだ。

気が強い事も、わがままなもの、キツイ性格である事も、それが私なんだと思っていた。私は・・・この自分勝手な私を受け入れてくれた人しか相手にしないって・・・そう思っていた。ふざけんなくてくらい傲慢な人間なんだと思って、ますます落ち込んだ。

聡太くんは、今の私はらしくないって言うてくれたけど、やっぱり反省して直さなきゃいけない所はいっぱいある。直したらもう一回航とちゃんと向き合えるかな？ それとも、もうこれで駄目かな？

・・・そんなどん底にいる時ノックの音がして、私は返事もしなかったのに勝手にドアが開いた。

荷物だけ部屋に置いて制服のまま朋花の部屋に行った。ノックをしたけど返事は無い。だがそれも今更だなと思えばそのままドアを開けた。

うわっ、暗い。

明かりの点いてない薄暗い部屋で、そこにいるはずの妹の姿を探すと、ベッドの上につづくまっていた。

朋花・・・それはいくら可愛い妹でもさすがに怖えーよ!? 未練
たらたらの幽霊みたいじゃないか、それ?

問答無用で電気を点けたが・・・もちろん、朋花が怒りだすのを覚
悟してたのだが、少し身をよじっただけで何も言わなかった。

あの安田ってやつのせいで・・・本当にあいつのせいで、朋花はこ
んなになるのか?

いつもの俺に対する態度とあまりにも違う姿に、半分驚いて・・・
半分は悔しかった。

朋花の正面に当たる場所に直じかに座り、小さくなっている妹を見た。
今までは、いくら母さんにきつく怒られても、前の学校でひどい目
にあったって、ここまで落ち込んだ姿は見た事がない。あの時は、
落ち込むなんて事はなく『暴れた』が正しいんだが・・・。

「朋花・・・暗いぞ。」

見たままの感想を口にしてみたが、微動だにもしない。

「朋花。さつき安田ってやつと話した。」

やつの名前を出しただけで朋花は顔を上げた。

「・・・なんで航?」

握った手に自然と力が入るのを感じ、大きく陣呼吸をして力を抜い
た。

「偶然。・・・色々聞いたぞ、学校での事。」

「何で?」

「心配だからだ。」

「心配なんかしてくれなくていいよ! だって私酷い人間なんだよ
!??」

珍しく後ろ向きな言葉を叫ぶ妹に驚き、そんな姿を見たくない俺は
慌てて否定した。

「酷くない! 朋花はそんなやつじゃないから大丈夫だ!」

「・・・何が大丈夫よ、気休め言わないでよ・・・私航に酷い事し
たんだよ? 和樹にだっていっぱい酷い事してきたよ!??」

「俺はお前の兄ちゃんだから平気なの! あいつだって平気だ。俺

も・・・安田も、お前の事すっごい心配してるんだ。」

「でも・・・、」

敵に塩を送るような事を言うのは癪だが、朋花には元気になってもらいたい。俺の気持ちとはとりあえず押さえ込んでおくしかない。

「あいつはお前の事好きだって言ったんだろ？　なら信じてやれよ。俺は好きになれないが、悪いやつじゃないと思う。」

「・・・知ってる。」

くそっ、そんな愛しそうな目をされると、胸に何か鋭い物を差し込まれた気分になる。

「なら、そんな所で小さくなってないで、仲直りする事考える。」

俺の言葉に妹は少し表情が緩んだが、それは再び曇った。

「・・・でも、キャンセルって言われたんだよ？」

「は？　何だそれ??？」

・・・あいつ、何か都合の悪い事隠してやがったのか？

俺の中にあつた、安田に対する信頼は、今この瞬間に消し飛んだ。

大事だからこそ（後書き）

むー、ここも少し短いですね。

文脈で区切ってるので、勘弁してください。

次が本編ラストで、少々長いです。

恋する乙女の暴走（前書き）

16話目、本編ラストです。

……ではさようば。

恋する乙女の暴走

朝、いつものように航の家のチャイムを押し、出てきた葵姉と話をしていたら、葵姉がふつと僕の後ろに視線をずらした。釣られて僕も振り向くと、少し強張った表情の朋ちゃんの姿があった。

「朋ちゃんおはよ、久しぶりに……。」

無言で僕の脇を通り過ぎた朋ちゃんは、門の前で止まるとチャイムを押しした。

1回……2回、3回、4回……

つい呆気にとられ、止めるのを忘れてしまつてたけど、我に返つて朋ちゃんの手を掴んで止めた時には、7回目の音が鳴つてしまつていた。

「朋ちゃん、連打はしないでねつて……前に言つたよね？」

いつか冗談で言つてた事を本当にやつた彼女に驚き、同時にそんな事をしでかした彼女が心配になつた。

「……航が早く出てこないからだ。」

おまけに、背中を向けている朋ちゃんの顔は見えないけど、声は泣きそつで、掴んだ手からは緊張が伝わってくる。

「……ねえ聡太、その子は？」

遠慮がちに葵姉が質問を口にした。とりあえず振り返ってみただけど、何と言つて説明したものか迷い、

「僕等の親友。」

と答えた。でもきつと僕はあまり説得力の無い顔をしているだろう。

「……そつ。」

葵姉は納得より、戸惑いの表情を浮かべている。

「加えて言つなら、若干、航と交戦中？」

「え、喧嘩してるの？」

「……少し違つけど、そんな所。」

その間も、朋ちゃんの手には力が入つたままで、必死に泣くのを堪

えているようだった。

「何だよ、今日はどうしたんだ？」

玄関が開く音と同時に聞こえた声の主に目をやると、航は欠伸を噛み殺しながら出て来て、動きを止めた。

「あ、朋花……。」

間の抜けた声を出す親友に勝手に目配せし、朋ちゃんの手を離した。
……後は任せた。

葵姉の側まで下がると、葵姉がこそそ聞いてきた。

「これ本当に喧嘩？ ……修羅場って言わない？」

それも何か違う。

「これからどうなるかで、呼び方決まると思うよ。」

でも一応僕の中に答えはある。途中経過の予想はまったくつかない二人だけど、最後がどうなるかってのは、よく分かってる。

「ごめん……航。ごめんなさい!!！」

勢いよく頭を下げた朋ちゃんに、航は慌てて駆け寄った。

「止めるって、俺が悪いんだってば。」

「違う、私航なら許してくれるって……何か勝手に思ってた、航の困った顔見たくて、つい色々ちよっかいかけて……ごめん。だから、キャンセルなんて言わないで! ……私……私、航の事好きだから……だから、そんな事言わないでよ……。」

きつと必死で泣くのを堪えていたんだろう……言い終わると同時に嗚咽が聞こえた。そんな朋ちゃんを航は優しく引き寄せた。

「悪かった。そんなつもりじゃなかったんだけど……泣かせるよくな事言ってごめんな。俺も朋花の事好きだから、なっ、だからそんな顔しないで笑って、いつもの真っ直ぐな目を見せてくれよな。」

涙を拭いてやりながら、いつもと変わらない調子で話しかける航は

正直凄いと思う。

二人とも、思った事をはつきり口にする性格だから、仲直りもくつつくのも驚くくらいあつという間で・・・うん、上手くまとまってよかつただけど・・・僕達は非常に気まずい。

「・・・私、先に行くね。」

「待って、僕も行く。」

正視できずに逃げようとする葵姉を、もちろん僕も追いかけた。

今日あの二人と一緒に行くなんて、絶対無理だ・・・もう二度と痴話喧嘩に巻き込まれるのは、御免被りたい。

途中葵姉の携帯に『遅い』っていうメールが入って、僕達は特に会話も無く急ぎ、大通りの横断歩道を渡って美晴さんと合流した。

「やっと来た・・・って聡太くんも？ 珍しいね、どしたの？」

意味ありげにニヤニヤしながら、僕と葵姉を交互に見る美晴さんに呆れて力が抜けた。

「・・・色々あります。」

「美晴、私達朝から凄いもの見ちゃった。」

「何？」

「相談してた件です。」

興奮気味に語ろうとする葵姉を、僕は一言で抑えてしまい・・・少しいじけてしまった。

「何よ、知らなかったの私だけ？」

「ごめん葵姉、話してなくて・・・でも弟の事だから言いにくくてさ。」

「じゃあ、まとまったんだ？ で、何があつたの？」

「とりあえず、歩きながらにしません？」

携帯で時間を確認し、二人にそう促した。

「ほら、何もしなくてよかったよね？」

「美晴さんは、こうなるって思ってたんですか？」

「んー、こうなるとは思ってたけど、正直こんなに展開が速いとは思ってなかった。やるね航。朋花ちゃんだっけ？ いいねーその子も。」

最終的にこうなる事を始めから予測し、予想を裏切られたと余裕で笑う美晴さんはやっぱり得体が知れない。

「聡太くん、先越されちゃったね？」

「・・・放っておいて下さい。」

「ねえ、そんなに自信無いの？」

「・・・ありません。」

「ふーん。」

そのニヤニヤ笑いは止めて欲しい。

「何が自信無いの？ 何の話になってるの？」

隣を歩いていた葵姉は、途中から会話を外れ、本人も少し下がった位置にいた。

「聡太くんが意気地無しって話。」

詳しく説明されても困るけど、そんな一言で片付けられるのも悲しいものがある。

「よく分からないんだけど？」

「うん、葵には内緒の話だからいいの。」

「・・・じゃあはつきり聞こえる所でないでよ・・・気になるじゃない。」

この人は僕の逃げ道を潰していく気だな・・・。明らかに楽しんでいる目を僕に向けて、葵姉をはぐらかしている美晴さんが悪魔に見える。

携帯の番号とアドレスを渡したのは、早まったかも知れない・・・。

一時間目が終わろうかという頃になって、ようやく二人が学校に来

た。

遅刻してきたくせに航と朋ちゃんも余裕で……二人とも晴れやかな顔で手を繋いだまま教室に入ってきた。今まで一体何をしていたんだか。

でも、考えるのもバカらしいから、もう考えない。

先生の苦言も気にせず、皆の冷やかしの声にも動じず……まったくこの二人はすごいよ。

僕があれこれ気を揉んでいたのは、本当に無駄だったのかも知れない。

……うん、本気で馬鹿らしくなってきた。

恋する乙女の暴走（後書き）

本編終了です。

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。
続いて、おまけが少々入ります。

朋花と航は意外と動いてくれない。

1 回目は、無理やり（？）考えた話は、もう航が「俺達こんなじやねーよ」とばかりに完全停止。

2 回目を書いてたのは、スタート同じなんですが、流れが違って、それは朋花が「違うでしょこれ」って止まってくれた。

じゃあこれなら！？と、書き直した3回目は、すんなり流れてくれました。

・・・動かないじゃなくて、主張が強いのか？

おまけの聡太くんサイドは、現在暴走して迷走中です（汗） - 3

/ 2 3 現在

これUPした後、紙ベースで再考します。

2 話で収まらないかもしれませぬ。

忠告（前書き）

おまけの1話目です。

2話では長すぎて、3話になりました。

・・・ではどういふ。

忠告

・・・よし、覚悟を決めた。
美晴さんにメールを送ろう。

美晴さんの言うように、航はちゃんと色々考えてて、きちんと自分でどうにかしようとしていた。確かに部外者の僕が首を突っ込む事ではないらしい。

その報告とお礼を兼ねて、メールを送ろうと思ったのだ。

だが、アドレスを知られると、何か悪用されそうな気がして携帯を見つめたまま悩んでいる。美晴さんの番号とアドレスは妹から渡された。イーブンと言えなくも無いが、僕には悪用する気は無く・・・あの人はやりかねない性格だ。

- - - - -
- - - - -

To 美晴さん

Subject その通りでした

航は確かに色々考えてました。確かに僕は見てるだけしか無いんですね。

- - - - -
- - - - -

後は送信ボタンを押すだけだ。

でも押せないまま、昼の休憩がかなり消費された。

・・・いい、送る。

断腸の思いで送信ボタンを押した時には、手にかなりの汗をかいていた。

緊張から解き放たれて、一息ついた頃にはもう携帯のバイブが揺れた。

返事が返ってきたらしい。早いな・・・暇なのか？

.....

.....

From 美晴さん

Sb Re . その通りでした

おっ？これ聡太くんの携帯？

貴重な情報Get！

.....

うわっ、やっぱりこうなるのか？

やっぱりあの人を信用しちゃ駄目だったのか！？

僕は慌てて返信した。

.....

.....

To 美晴さん

Sb Re . Re . その通りでした

止めて下さい！！

.....

.....

.....

.....

From 美晴さん

Sb Re・Re・Re・その通りでした

冗談だよ。

あのさ、もう1つ気になる事があるんだけど、どっかで直接話せない？ たぶん、聞いた方が身のためだよ？

- - - - -

- - - - -

To 美晴さん

Sb Re・Re・Re・Re・その通りでした

何の脅しですか？

- - - - -

- - - - -

To 美晴さん

Sb Re・Re・Re・Re・その通りでした

脅しじゃなくて、忠告。

- - - - -

そんな気になる書き方されると、会わざるを得ないじゃないか。

・・・わかりました。と返事を出して、帰りに待ち合わせる事にな

った。

高校の校門の側で待っていると、お待たせと声がして美晴さんが近付いてきたが・・・顔色が良くない。

「大丈夫ですか？ 体調悪いんじゃないですか？」

「大丈夫。気にしないで、お腹痛いだけだから。」

いやだけって言われても、気にしないのは難しいと思う。辛そうで全然大丈夫そうには見えない。

「それ本当に大丈夫なんですか？」

「・・・どうにもできないから、気にしないで。」

美晴さんは完全拒絶のオーラを放っていて、だからこそ余計に気になる。

「でも・・・、」

「はい、わかった。はっきり言おう、ただの生理だから、そういうもののなの。」

「・・・失礼しました。」

開き直ったようにはつきりと明かされた理由に、僕はただ非礼を詫びる他なかった。

シユンとした僕に、美晴さんの笑い声が浴びせられた。

「そういう時は察しようよ・・・私は別にいいけどさ、他の人なら分かんないよ？」

「はい、以後気を付けます。」

確かに。気付けなかった自分の、あまりのデリカシーの無さに情けなくなった。

「でも、そんな話じゃないんだ。」

そう言っつてすぐに切り替え、美晴さんは真面目な顔になった。

「あのさ、航と・・・名前何だっけ？」

「ああ、石井朋花です。」

「そっか、うん、航と朋花ちゃんがうまくいったら、聡太くんはどうする？」

何が言いたいんだろう？

歩きながらの問いかけに、僕は首を傾げるしかない。

「どうって・・・嬉しいですけど？」

互いの思いに気付いて、二人が幸せになれば、友人としては嬉しい。そして僕も、前みたいにも通りで、ギスギスした空間で板挟みの状態からは開放される。

「うん、けど聡太くん一人あぶれちゃうよ？ しかも、聡太くんは航くらいしか仲のいい友達いないよね？ どうする？ 一人にいる？ それとも二人の邪魔をあえてする？」

痛い所を衝かれた。そっか、前と同じっていうわけにはいかないのか・・・。

「聡太くんは邪魔なんかできないよねー、きつと離れて一人でいるんだ。」

何でこの人はこんなに見透かした事を言ってくるんだ？

「航が用意してくれた場所で安心してないで、これを機にでも、自分で切り開いて行かないと駄目だと思うよ？ この先ずーっと航と一緒にってわけじゃないだろうからね。」

美晴さんは前に回り込んで僕を見た。その目にはどこか優しいものがあった、その言葉はとても辛辣だった。メールにあった忠告という文字の通り、確かに・・・僕があえて目を向けずにきた部分を見事にえぐられた。

何故この人はこんな事を言ってくるんだ？

小さい時からあまり積極的では無かった僕にとって、幼稚園は怖い場所だった。

親と離れるのが不安で、最初のうちは泣いてばかりいた。しかし、そんな僕にあれこれちよっかいを出して、ガンガン話しかけてきたのが航だった。

年長に姉のいる航からすれば、歩きだした頃から通っている幼稚園は憧れの場所で、やっと自分も通う事ができるようになったのが嬉しくてたまらず、僕のように怯えているのが理解できなかったらしい。

航のおかげで家とは違う環境にも向かう事ができるようになり、僕達は当然のように仲良くなった。

そして、その関係は今もそのまま続いている。

航の側が僕の居場所で、その外に向かう事なんか、これまでまったくしてこなかった。

それどころか、思いもしない所で、僕が原因のようないざこざが起きていたり、距離を取った扱いを受ける事も多く、僕も自分から距離を置くようになった。

だから僕の交友関係は、ごく狭い。

いつも受身で、このままでは良くない事は理解している。

・・・でも僕はどうしたらいいんだ？

「まだ航兄ちゃんの事悩んでんの？」

夕飯を食べながら、妹が不満気な顔で口を開いた。

「それもあるけど、今は自分の事。」

「なーんだ、じゃあ鬱陶しいから止めて。」

妹は冷たい視線を一瞬僕に向けて、テレビに視線を戻した。

そこに映るのはバラエティー番組で、最近は芸人ばかり目にする。どこのチャンネルでも、どの番組でもあまり変わらないような気がして、僕は正直飽き飽きしてきているのだが、この時間のチャンネル権は、基本的に妹が握っている。

「お兄ちゃんもさ、たまには笑おうよ。」

唐突に妹がそう言った。目はテレビに向けたまま淡々と更に続ける。

「笑おうが悩もうが、過ぎる時間はどうせ変わらないんだよ？ だったら楽しんだ方がいいって思わない？ 悩んで悩んで、つまらない時間の使い方して損ばっかしてるのはもったいないと思う。」
妹はそんな考え方をするのかと、自分との違いに少なからずショックを受けていると、更に言葉が続いた。

「つて、美晴さんが言ってた。」

「・・・そこ、受け売りなのか。」

「でも、私もそう思うよ。」

妹は僕を見た。

「お兄ちゃんは、もったいない事ばかりしてるから、私見てて苛々するんだから。」

睨むように・・・きつと長年の思いをぶつけられたのだろう。でも、僕には何も言えなかった。理佐の言葉は・・・受け売りの言葉は驚きの膜に弾かれて、まだ僕の中に染み込んで来ていない。

「ご馳走様！」

そんな僕の様子に妹は、苛ついた様子で自分の食器を流しに置いて、部屋を出て行ってしまった。

忠告（後書き）

最初の頃の何となくの設定で聡太くんは、ちょっと腹黒目？

とか思ってたんですが、書いていくうちに本当に結構黒くなってきた気がして、ちょっとそこを・・・

それと、そろそろ引つ張り出さなきゃ！？

って、まあ、いつも通り勝手に二人が動き出したんですが。

まさか、こんな事になるとは・・・書いててびっくり。

という事で、

あと2回、お付き合い下さいませ。

会話(前書き)

おまけの2話目です。

……じやないん。

会話

翌日は気まずいまま過ぎ、その次の日の朝。

出かける気マンマンの格好をした妹が部屋に入ってきた。

「お兄ちゃん出かけるから支度して！」

え？ それどういう事・・・？ そんな約束なんかしてないし、家族で出かけるなんて話も聞いてはいない。

「理佐、何？ 出かけるって、誰と？」

「私とに決まってるでしょ？」

こいつ察しが悪いな・・・と、顔に書いてある気がするが、察しよ
うがない。

僕は普段着のまま、本を開いていた体勢で固まり、頭だけを手がかりの無い問題に使っていた。当然の事ながら答えには辿り着かない。「いいから、さっさと着替える！ 私と一緒に歩くんだから、マシな格好してよ！？」

それだけまくし立てると、部屋から出て行った。

・・・マシな格好って何だ？

仕方無く上だけ着替え、上着を羽織ると、まあいいでしょと、妹から及第点をもらえたらしい。

「どこに連れて行く気だ？」

「しつこいなあ、着けば分かるから、今は黙ってて！」

前に行く妹の後ろを追いかけながら、何度目かの質問をぶつけるも、『着けばわかる』の一点張りで、今はさっぱり分からない。

そのうち見知った姿を見つけ、その人達はこちらに手を振ってきた。

「理佐ちゃん待ってたよー。」

「ごめんね和歌ちゃん、お兄ちゃんが準備遅くってさ。」

はいはい、いいよどうせ僕のせいですよ。何も聞かされてないのに、突然準備させられた僕が遅かったんだ。いいよ、それで。

理佐は、美晴さんの妹の和歌奈ちゃんと、手を取り合ってピヨピヨしている。

この二人はとても仲がよくて、しょっちゅうお互いの家を行き来している。

そしてこの場にいるのはそれだけではない。

「ほらほら聡太くん、そんな顔しない。そんなストレスばっか溜めてたら、胃を壊すよ？それにほらここの皺・・・消えなくなるよ？」
そう言っつて、おかしそうに僕の眉間を美晴さんが指で突付けてくる。

「止めて下さい。理佐、何で・・・」

「だから、楽しめつて言っつてんの！？ 何でもかんでも、そうやってつまらない顔するの止めてよ。」

僕の言葉の途中で、妹が先に爆発した。

「突然何も教えられずに連れて来られて、困惑しない方がおかしいだろ？」

「結局付いて来てるくせに、今更何言っつてんの！？」

「まーまー、そのストレスはこれから解消しに行こうね。」

往来で声を荒げる僕達に、美晴さんはまったく動じる事無く笑っていた。

・・・ストレス解消っつてこれですか？

連れて来られた場所はカラオケ。

「僕、人前で歌うの苦手なんですけど・・・。」

「気にしない、気にしない。大きな声出すだけでストレスっつて結構発散できるものなんだよ？ 他には泣くのと、笑うのもあるけど、そっちの方が良かった？」

・・・何を泣けと？ いや、泣きたい気分ではあるけどそう簡単に泣けるものでもない。

「じゃ、行こうか。」

渋る僕の意見はさらりと流され、美晴さんに背中を押されて店内に

押し込まれた。

店の人に案内された個室に連れ込まれ、とりあえずウーロン茶を頼んだ。

ランキングや、プロモーション映像の流れる賑やかな室内で、妹と和歌奈ちゃんは、分厚い曲のリストを真剣な顔で覗き込んで選んでいる。美晴さんも同じように分厚い冊子を抱え、パラパラと何気なく捲りながら、少し微妙な表情をした。

「どうかしたんですか？」

違和感を感じてその声をかけると、美晴さんは僕の方に少し寄ってきて、意外な事を言った。

「本当はね、私も苦手なんだよ。人前で歌うの。」

「は？　どういう事ですか、それ？」

「じゃあ何でこんな所に、しかも楽しそうに連れて来るんだ？」

「歌うのは嫌いじゃないけど、私あんまりポップス聴かないから曲分かんないし、人前つてのはやっぱり恥ずかしいんだよ。」

「じゃあ何で、ここに？」

「ストレス発散って言ったよ？　声出すのはいいんだってば。」

「発散しに、無理して来る事無いんじゃないですか？」

「何言ってるの、聡太くに発散してもらったためだよ？　それに私も、意地でも楽しむに決まってるじゃないか。」

いや、それ何かがおかしい。

「ワンパターンって言われても、知ってるのしか無理だから、それを魂込めて歌う。適当に歌うなんて事もしたくないからね。で、聡太くんは何にする？」

リモコンで曲を入力し終わると、それまで自分が見ていた冊子を「ほら」と渡された。

この人、完璧主義者なのか？

知ってるのを魂込めて歌うとは言ったが、確かに相当歌い込んだ感

じがあつて・・・他の曲は知らないけど、この曲に関しては上手いと思う。

発声にしても、感情を込めるにせよ、たかがカラオケにそこまでしなくてもいいんじゃないかって思うくらいだ。

次は僕の番が回ってきて、嫌々ながらもマイクを取った。

「さすが男の子、低い音出ていいなー。」

そんな所を羨ましがられるとは思ひもしなかった。

次の曲を選ぶのに忙しい二人は、聞いている感じは一切なくて、観客はこの隣の人だけなのだが、僕が歌い終わつての第一声がこれだ。

「・・・そんなもんなんじゃないんですか？」

声変わりは2年の初め頃に始まった。その時はさすがに戸惑ったが、今はもうこれが当たり前だ。

「あー、その決め付け気に入らないな。できない事をできないって言っちゃうのは簡単だけど、そこを・・・こう、クリアした時の達成感ってのがいいって思わない？」

力説が始まった。達成感は悪くないと思うけど、本当に無理な事は無理だと思う。

「できない事は、やっぱりできないでしょう？」

「それは、やってみてできなかった時に初めて使う言葉だ。」

やっぱり言う事がおかしい。

「いいなって事はつまり、できなかったって事ですよね？」

「ぐっ・・・私まだ認めてないから。」

しかも負けず嫌いなんだ。

視線を逸らせ、口を尖らせ、しかも拳まで握り締める姿は・・・子供だろこの人？

とりあえず何曲か歌い、後は歌いたい二人に好きにしてくれといった感じで、席にもたれて幾分薄まったウーロン茶を流し込んだ。

美晴さんも似たような態度で、こちらは冷めた紅茶を今更のように

飲んでいる。それ絶対ホツトの意味が無いと思う・・・けど、本人は満足そうだ。

いいんだけどさ、それよりもっと気になる事がある。

「美晴さん・・・何で僕にこんなに構うんですか？」

オモチャにされてる感じでもなくて、異論はあるけど真面目な事言つて、自分が好きでもないカラオケにわざわざ引つ張つて来て・・・その行動原理が分からない。

「ん？ 聡太くんが私に似てるから。」

軽く言われた以外かつ驚愕な内容に、まずは耳を疑った。

・・・僕が美晴さんに似てる？

「どこが？・・・ですか？」

「こっじゃなきやいけないって、勝手に自分を粹に嵌めてることか、我が侂言えない所とか、頑張っちゃう所とか、あとは・・・妹に振り回される所？」

最後は取つてつけたように言つて笑った。

「・・・僕には美晴さんが、奔放な人に見えるんですが？」

「そっか、なら良かった。」

そう満足そうにして、再び紅茶に口をつける。

一体何がいいんだ？ よく分からない。

「何がいいんですか？」

「んー？ 人の隠してる部分を暴こうなんて事、しちや駄目だぞ？」

・・・それ、僕の事を見透かしたように言う人の台詞ですか？

「そんなにしんどい生き方してるんですか美晴さん？・・・それに僕も？」

粹とか我が侂とか、そんな言葉を使うと、ひどく不自由な人生のよくな気がしてくる。

「さあ？ 自覚の有る無しは分からないけど、楽しく生きたいだけだよ、私は。」

夕飯の時に妹が、この人の受け売りで言っていた事と同じだ。

せじほじよく分からぬい。

会話（後書き）

服装は、ご自由に想像下さい。

妹が喧嘩売ってきました。

なぜかカラオケでした。

書いてて、へーって状態。

喧嘩（前書き）

おまけラストです。
これで本当に終了。

喧嘩

カラオケの後は、ファミレスに連れて行かれ、少し遅い昼食をとる事になった。

メニューを広げてあーだこーだと騒ぎ、何を食べるかが決まるのを散々待たされ、やっと注文できたところで、美晴さんが意味ありげな笑みを向けてきた。

「聡太くん、退屈なら葵呼ぼうか？」

しかも上着から携帯を出して、今にも連絡してしまいそうだ。

「何でそうなるんですか？」

「欠伸してたから。」

「・・・振り回されて、疲れてるだけです。退屈してる暇なんかありませんよ。」

『欠伸』退屈』って思われてもな・・・流されっぱなしで、自分の立ち位置もよく分からない。いや、でもメニュー見ながら騒いでるのはいい加減にしてくれとは思っただけ。

「そう？ 葵が来ればシャキーンと晴れやかな聡太くんが見れるかなって思っただけだな。」

・・・無愛想ですみませんね。

「家でもずーっとこんな感じで、本当に鬱陶しいんだから。」
妹まで余計な事を言ってくれる。

「そうなんだ？ それはかなり迷惑だね。」

和歌奈ちゃん、そっちこそかなり失礼だよ？

「とりあえず、笑顔でいた方がいい事が寄ってくるってもんだよ？
自分は何て不幸なんだって、そんな顔していると損するよ？」

そう言う美晴さんは、何が楽しいのか基本いつも笑顔で、もちろん今もだ。そして、その話はテレビで見た事がある。

「だから美晴さんは実践してるんですか？」

僕と似てるって言うんなら、心のどこかを隠して笑顔でコーティン

グしているって事になる。この人の方こそ、相当暗い部分を内包して
るんじゃないのか？

そんな人に偉そうに説教される謂れは無い。僕の刺々しい言い様に、
妹がきつい目を向けてくるが気にするもんか。今僕は散々振り回さ
れて迷惑してるんだ！

「そうだよ。」

「・・・認めた！？」

あっさりそう言われ氣勢をそがれた僕は、内心の憤りのやり場に困
り言葉を失った。

そのうちにお店の人が注文した料理を運んできて、テーブルに並べ
始めた。

談笑の聞こえる店内で、このテーブルだけが別世界のようだ。

『食事は楽しく』と、よく聞くフレーズが頭を過ぎるが、それはぶ
ち壊した本人の言う台詞ではない。

妹はハンバーグを頬張りながら相変わらず睨んでくるし、和歌奈ち
ゃんはとりあえずビビンバを食べる事に専念している。

そして美晴さんは何かを考えているらしく、少しぼんやりした様子
で黙々とトマトソースの Pasta を口に運んでいる。

そんな重い空気の中、僕はモソモソとドミグラスソースのオムライ
スをひたすら食べ続けるしか無かった。

「決めた。」

食事が終わり、料理と同時に持ってきてもらったチャイを今更のよ
うに手にして、美晴さんが急に口を開いた。

「おねえちゃん、何を決めたの？」

和歌奈ちゃんが、皆が抱いている疑問を言葉にした。

「理佐ちゃん、ここ出たら兄貴借りてくよ？」

「・・・はあ、どうぞご自由に。」

あの・・・僕、物扱いされてませんか？

「借りるって、どこに連れて行く気ですか？」

「まだ教えない。」

そうきつぱり言い切った美晴さんは、まったく笑ってなくて・・・僕、怒らせたのかな、やっぱり。

ファミレスに行く前まで居たカラオケの店に再び連れて来られた。その時は四人だったが今は二人だ。

「何でまたカラオケなんですか？」

どうして好きじゃないと知ってる場所に、一日に二度も連れて来られなければならないのか？ 連れて来た人がカラオケ好きならただの嫌がらせなのだが、その本人も苦手だと言うのだから意味が分からない。

「二人とも苦手なものだからだ。」

美晴さんはそう言って分厚い冊子を捲りだした。本当に意味が分からない。

「順位の高い方が勝ち、5曲までの勝負でどうだ!？」

「・・・は？ どういう事ですかそれ？」

勝ちって何？ 今一体、何の勝負をふっかけられてるんだ？

「聡太くんを本気にさせる。私の勝ちなら、聡太くんの代わりに私が葵に言うぞ？」

おかしな流れになってきた。そもそも最初からおかしかったが、更におかしくなった。

「・・・何をですか？」

「葵が好きって事に決まってるじゃん、他に何かある？」

美晴さんは冊子に目を向けたまま平然と、いや、察しが悪いと呆れたように言った。

「・・・悪魔かこの人は？」

「何で今ここでそれが出てくるんですか？ 何がしたいんですか？」

僕には美晴さんの言ってる事がさっぱり分かりませんよ!？」

「だから、たまには必死になつてみるつて言つてんの、いつもいつも周りに流されて、その身を嘆いてばつかいしないで、嫌なら自分で阻止してみる！ 聡太くんはお姫様か！？ 守ってくれる騎士や従者がいないと自分じゃ何もできないのか！？」

「だ、誰がお姫様だつてんですか？」

「ほら、口先だけじゃなくて、行動で示してみな。いつまでも安全な場所に引き籠つてないで出て来い！」

そこまで言われると、さすがの僕もムキになり・・・

「何様ですか！？ あなたに言われたくありませんよ！！」
完全に美晴さんのペースに乗せられた。

僕は美晴さんを怒らせた。

兄弟げんかみたいな言い合いじゃなくて、小さい頃みたいな取っ組み合いでもなくて、カラオケで順位の高い方が勝ちつていうよく分からない方法だったけど、僕達は確実に喧嘩をした。途中から5曲までつてルールはどこかにいつて、しかも、順位の高い方がつて部分も、一位取つた方がつていう、後から考えたら無謀なものに取つて換わられ、最後には二人とも声が枯れていた。

結局どちらも一位は取れず、疲労感と悔しさを残したまま時間切れを向かえた。

雄々しいクラシックの曲が鳴り響き、「どこで何してんの？ 何時だと思つてんの？」つて、和歌奈ちゃんからお叱りの電話が美晴さんに入ったからだ。

そうでなければ、どこまで続けていただろう？

「・・・ごめん聡太くん、妹がお腹空かせてカリカリしてるから、急いで帰つて作んなきゃ。」

違和感のある声で僕にそう言い、再び携帯に向かつて宥めすかせていた。

確かにこの人も妹に振り回されている・・・そこは認める。

少し前まで勝手に人の事を分析して、偉そうに説教してた人が、さつきまであんなにムキになって張り合ってた人が、妹に平謝りって・・・笑うしかない光景だ。

久しぶりに腹を抱えて笑う気がする。

「確かに笑顔の方がいいとは言ったけど、私を笑えとは言っていないぞ。」

不本意そうな声に続き、携帯の閉じるカチッという音がした。

「だ、だっっておかしい・・・ん、ですもん。」

喋るのも必死なくらいだ。

「・・・ああそうですか、未だに葵に告白できない聡太くんも十分滑稽だよ。さあ、とっとと帰ろう。」

嫌味を忘れない所が、さすがの負けず嫌いだ。

「ちょ、ちよつと待って、笑い過ぎて酸欠。」

「・・・早くする。そうじゃないとここ全額払ってもらおうよ?」

待て待て、ここに何時間いた?

「それは違うでしょう? 予定外ばかりで今日はいいい加減散財なのに、絶対半分しか出しませんかよ?」

「その意気だ。」

上着とカバンを抱え、扉に手をかけて振り返った美晴さんの顔には笑みが戻っていた。

それを見た瞬間『やられた』と感じた。掌てのひらから出られなかった斉天大聖はきつとこんな気分だったに違いない。

「・・・いちいち腹の立つ人ですね、あなたは?」

「言われたくなければ、さっさと告れ。」

わざわざ腹の立つ言い方で、そう残してさっさと部屋を出て行ってしまい、僕が遅れて出た時にはもう会計を始めていた。

「全額払ってもらおうよ」なんて言ってたくせに、結局は僕が半分出すと言っても、私がつき合わせたんだと言って突っ撥はねられた・・・この辺りがこの人の粹なのだろう。

「そうだ、ついでに携帯の番号も教えて。」

美晴さんの住むマンションの下でそう軽く言われ、

「ああ、はい。」

と、妹から教えてもらった美晴さんの携帯にワンコールした。

この時は、知られるのが嫌だとか、そんな事はまったく考えもしなかった。

ただ自然に、当たり前のように携帯を操作した。その代わりに、こんな事を考えていた。

知りたいなら僕のように妹に聞いてしまえばいいのに、わざわざ直接聞くなんて律儀な人だな。この辺りもこの人の粹なんだろうか？

・・・と。

「ありがとう。じゃ、また今度決着を付けよう。」

「僕はもう嫌です。」

携帯を確認してから、二回戦目を提案してきた美晴さんに、即答で断りを入れると二人で笑った。

「残念だなー。そうだ、見掛けだけじゃないって、少しは自信持ってた？」

「酷い言いようですね、でもスッキリした気はしますよ。」

見掛けだけって部分には言いたい事がたくさんあるが、所詮僕の責任ではない事にあれこれ言った所でどうにもならない。でも、今日二人でムキになって大騒ぎした事で、どこか吹っ切れた感じはある。

「そっか、体を張ったかいがあつたなー。」

「そんな上からな目線は癪に障るんで止めて下さい。美晴さんも子供みたいにムキになってたじゃないですか。」

そう。僕は軽く言っただけだった。

でも、その言葉のどこにスイッチがあつたのか、美晴さんの顔から笑みが消えた。

「当たり前前、私はまだ子供だ。」

がらりと変わったその雰囲気気圧され、何も言う事ができなくな

った。

「・・・あ、ごめん、帰らないと。和歌奈の小言が増える。」

美晴さんはしまったという顔をして、誤魔化すように無理に笑った。それから「じゃあ」と軽く手を振って、建物の中に消えた。

今日で余計にこの人の謎が増えたような気がする。

これは僕の推測であって、本当の所はよく分からない。

美晴さんの父親が亡くなっていない事は知ってる。そのために母親が仕事で留守がちなのも聞いている。ただ、美晴さんはそんな素振りをもつたく見せないのです、これまであまり気にしてなかった。

「ご飯作らなきゃ」って、当たり前のように言われた言葉は、僕にとっては当たり前ではない。

苦しんでないように見せて、でも本当の所はきつとしんどい部分がたくさんあるんだろう。それが・・・今、少しだけ見せた本音の部分で、笑顔でコーティングしてる内側なのかも知れない。

何不自由無い僕が不満ばっかじゃ、そりゃ腹が立つだろうな。

『安全な場所に引き籠ってないで出て来い』か・・・まったくだ。そんな事をぼんやりと考えながら、僕は家まで歩いた。

そして、この日から約2週間後。

朋ちゃんから僕の隠し撮り写真を見せられ、美晴さんの悪行を知る事になる。

カラオケ代分の恩や、境遇への勝手な哀れみなど感じる必要が無かった事を知り、やっぱりあの人は信用ならない悪魔だ。

と、僕の中で美晴さんは、そう定義付けられる事になった。

喧嘩（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
これで、この題の話は終わりです。

再びカラオケに行くとは、本当に以外で、
へーそうなんだ。って書きながら思った。
本当に、「自動書記」と後書きで栗本先生が書かれてたのがよく分
かって、ものすごく嬉しいです。

ちなみに、聡太の考える美晴の推測は外れです。
この人がそんな事で悩んでる訳が無い。
逆に、自分が子供である事の力不足を痛感しているはずですよ。

えーと、次はどこでしょう？
時系列でいくなら、「求める者。」の書き直し？
でもいいかげん美晴の方も進めたい。そっちは「そう遠くない未来。
」と銘打っております。
どっちが先にできるかなー？

功一くんの最終話も、もう1話途中です。
さー頑張れ私。

露見（前書き）

この前の話で終わりのはずだったのですが、

「憂鬱」繋がりでもう一本。

短編です。

ではごいせ。

露見

お弁当を食べた後、トイレに行つて戻ってきたら、廊下に5人くらいのクラスの女の子が集まっていた。その中には雅美ちゃんもいたから、ちよつと気になった。

雅美ちゃんは、この学校に転校してから初めてできた女の子の友達だ。

私と同じくロックが好きで、よくアマチュアバンドの動画で話で盛り上がったりする。

きっかけは、私が読んでいる雑誌を雅美ちゃんも読んでたのを見つけた事。それで私から声をかけて・・・これまでの私の態度があれだったから最初は驚かれたけど、今は普通に話せる仲になったと思う。雅美ちゃんと仲のいい友達も、最近は話してくれるようになり、以前の自分より少しはマシになったと思う。

「雅美ちゃん、何してんの？」

何となく割つて入ると、別の子が数枚の写真を持って・・・つてそれ聡太くん？

「あー朋ちゃん。これはね、えーと・・・」

どこか気まずそうにする人達の中、私一人だけ驚いた顔をしていた。

「って事でこれ、聡太くんの妹がくれたんだけど。」

机の上に置かれた3枚の写真に目が釘付けになった。

おそらく下校中に撮られたらしい写真が2枚に、もう1枚は家のリビングだ。

もちろん僕には撮ってもらった覚えは無い。

「・・・何これ？」

「だから、雅美ちゃんに写真の出所を聞いたら2年生の子だったから、2年生に聞いてみたら、聡太くんの妹紹介されたの。もう一人友達もいたけどさ、一緒に売ってるみたいだよ？」

「・・・そうか、いつ撮られたのかは分からないけど、リビングの写真は当然理佐の仕業だな。で、他の2枚は・・・」

「ねえ朋ちゃん、その友達の名札に『大垣』って書いてなかったかな？」

「あー、そうだったかも。じゃあ心当たりがあるんだ？」

このやり取りを「俺半分に切れてるなー」とか暢気な事を言っつて写真を眺めていた航が、急に笑い出した。

「そっか、それなら分かる。あいつならやりかねねえー!!」

「何？ ねえ私だけ分かんないの？」

いい、朋ちゃんは分からなくていい、朋ちゃんはどこか気が合いそうな気がするから、あまりあの人に会わせたくない。

「・・・あの3人に、朋ちゃんまで加わるなんて恐ろしい事は考えたくない。」

「朋ちゃん、教えてくれてありがとう。」

感謝の言葉を笑顔で言っつたつもりだったんだけど、二人はどこか引いていた。

「ちよつとごめん、用事ができたから・・・。」

そう言い残して席を立ち、胸ポケットに入れてある携帯を握り締めた。

「ねえねえ航、あれ相当怒ってるよね。」

「だな。」

「ところであいつって誰？」

「あー、うちのねーちゃんの友達。って朋花は知らないか、こういう事を面白がってる、性格に難有りの人物だ。」

「・・・そ、なんだ。大変だね聡太くん。」

「だよな。」

聡太が消えた後・・・どうせ抗議のメールでも送ってんだろうな。俺は、美晴のこれまでのイタズラの数々を面白おかしく朋花に聞かせてやった。

多少の誇張があつたかもしれないが、朋花が笑ってくれたから、まあそれは些細な事だ。やっぱり、朋花は笑っている方がいい。もうあの時みたいに泣かせるようなマネはしたくない。

メールを1件送ってから、妹のいる教室に向かった。

そこで理佐と和歌奈ちゃんを捕まえて引き立て、荒む心を何とか宥めながら二人から事情と言いつつ聞いた。

特に妹が不満気な様子でもあまり反省の色が見られないが、予鈴がなつたので嚴重注意を言い渡してとりあえず開放した。

所詮この二人は協力者に過ぎない。

主犯は当然あの人・・・いや、あの悪魔だ。

学校が終わると、帰り道にある高校の前で待ち、15分くらいその場に立ち尽くしていると、やがて目当ての人の姿が見えた。

「あーあ、とうとうばれちゃったか。」

近付いてきた美晴さんはまるで悪びれた様子も無く、とても残念そうな顔で聞き捨てならない台詞を吐く。

「・・・とうとうって、いつからこんな事してたんですか？」

「ん？ 半年くらい？」

「・・・何で、こんな事したんですか？」

「そりゃ、需要と供給。」

・・・駄目だ、聞けば聞くほど何かが消耗していく。

テンポよく返ってくる言葉に、罪悪感は微塵も感じられない。

「・・・とにかく、こういう事はもうしないで下さい。迷惑です。」

「まあまあ、そう言わずに・・・そうだ、こういうのもあるんだけど?」

そう言いながらカバンを探り、水色の封筒を取り出した。

「今の手持ちはこれくらいしかないんだけどさ、これあげるよ。」

その封筒からさらに何枚か抜いて差し出された物は、やはり写真で・・・あまりにきれいな葵姉の姿に思いつきり赤面し、今まで怒っていた事を一瞬忘れそうになった。

・・・これ、きつと修学旅行で着たつて言つてた太夫の格好だよな。葵姉は恥ずかしかつてその時の写真をまったく見せてくれなかつたけど・・・つて待て待て、美晴さんがこうして持つてるつて事は、葵姉の写真もばら撒かれてるつて事か!?

「・・・まさか、これも売つてるんですか?」

「ん? 結構人気だね。」

「で、これで僕を買収して黙らせる気ですか?」

「さあ? だといいなとは思つけど、その様子は黙つてくれないよね? あーでも写真はあげるから大丈夫だよ。ほらほら、需要と供給だから。」

よくもまあ、次から次へとこの人は・・・

とりあえず写真をポケットに仕舞つて、腕を組んだ。

「これまでの事はもうどうにもできないけど、もう二度としないで下さいね。」

自分でも幾分勢いが落ちたのは意識している。でも、言っておかねば成らない事は言わねばならない。

「んー、じゃあ努力目標として掲げておくから。」

「目標じゃなくて、命令だと思つて聞いてくれませんか?」

「じゃあ善処・・・」

「厳守してください! まったく口の減らない人ですね、あなたは。」

どうしてこんな言葉遊びになるんですか？」

このやり取りで下火になっていった勢いが再燃する。まったく、この人と話していると苛々してくる。

「・・・もー、冗談が通じないなー聡太くんは。」

「そんな冗談止めてください。勝手に人の写真を撮って、しかも売りさばくなんて、何でそんな事思いつくんですか？」

「だから、欲しいって人がいたからあげたの、それが発端。モテル男は辛いねー。」

癪に障る軽口に、埒が明かないやり取りに、反省の無いこの人に、僕はもう一気に脱力し、話をするのも嫌になった。

「・・・嬉しくもなんともないです。とにかく迷惑だから止めてください。」

「心配しなくても止める時が来たら止めるよ。」

「即刻止めてください。」

「はいはい、聡太くんの意向は覚えておきますよ。」

僕や葵姉の写真が、どのくらい出回っているのか分からないが、しばらくは会う人のすべてを疑ってしまいそうだ。

羞恥心と嫉妬心と猜疑心。

負の感情ばかりに取り付かれた僕の眉間の皺は、当分消えそうにない。

結局、この不承不承の返事は守られる事無く、その後も何度か売られていたらしい。

美晴さんの言う『止める時』が来るのは、まだしばらく先の事になる。

露見（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

またストレス発散です（^^）；

「君を求める。」のリメイクの草稿をあげたのですが、それが思ったより自分の消耗が激しくて、

一度書いた物を、もう一回。しかも場面によっては「大人になるまでに。」でやってるので三回目。

こういうのは結構きついなど、思い知りました。

だから、そのまま紙での修正に入る気分になれず、

おまけに、功一さんの最終話も結局迷走したままで、書き直した方がいいのになって、

・・・ちよつと逃げました。

これまでの会話に何度も出てきた写真の件。

前回の話で前振りのように書いてしまったので、じゃあこれだって、そんなノリで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1831r/>

親友ともう一步。

2011年6月11日11時00分発行